

SBS学習テキスト

エペソ人への手紙

キリストの測り知れない富

「パウロの書簡の頂点」

「最も神的な作品」

「すべての手紙の中で最も王者的な手紙」

「この手紙は純粋な音楽である……ここで私たちが読むのは、歌う真理、音楽となった教えである」

「エペソ人への手紙は、これまでに書かれた中で最も重要な文書の一つである。」

「パウロ書簡の最高峰」

この手紙は、ほかのどの手紙にもまさって、キリスト教信仰の本質、起源と地平、その豊かさと影響を描き出しています。この信仰は、死んで、よみがえり、王座に就かれた神の御子に錨を下ろしています。

Hans-Jörg Ronsdorf / キリスト者の教会ケンプテン (Christliche Gemeinde Kempten、アルゴイ地方)

目次

- エペソの町
- 手紙の受取人
- パウロ、テモテ、ヨハネとエペソ
- 手紙の執筆のきっかけ
- 手紙の内容と構成
- 天上：それは私たちからどれほど離れているのか
- 天上にある霊的祝福：それは何か
- 選び（予定）：ただの論争テーマか
- 子とされること（養子）と子であること：単に同じことか
- 座る — 歩む — 立つ：神の順序
- 新約の教会：いつから存在するのか
- 神の満ちあふれる豊かさ — 万物の目標
- 旧約聖書の予型論とエペソ人への手紙
- かしらであるキリスト：一致、機能、代表

- 五つの人物の賜物：使徒、預言者、伝道者、牧師、教師
- 新しい人：どこで、どのように見えるものとなるのか
- 支配と権威：悪い者と目に見えない世界
- 神の武具：靈的戦い、しかしどのように
- エペソとコロサイ
- 参考文献

エペソの町

エフェソス（ラテン語 Ephesus、ギリシア語 Ἔφεσος、トルコ語 Efes。聖書ではエペソ）は、古代において小アジア（現在のトルコ）で最も重要かつ最も古いギリシア人の町の一つでした。エペソはイズミルの南約70キロ、トルコの西海岸（エーゲ海）からほど遠くない、古代のイオニア地方にあります。古代には海に直接面していました。堆積作用と、気候や地震による変化のために、海岸線は時とともに西へ移動しました。そのため町は今日では数キロ内陸にあり、もはや港町ではありません。

エペソはローマ帝国で最も重要な町の一つであり、優に20万人を超える住民を擁する、最大の町の一つでもありました。またアジア州の総督（プロコンスル）の所在地でもありました。町と裕福な市民の双方が資金を出して、数多くの公共建築が建てられました。その中には、皇帝礼拝の一環として崇拝された皇帝ウェスパシアヌス（Vespasian）とハドリアヌス（Hadrian）の神殿も含まれていました。宣教という点から見ると、エペソは大きな交易路と港に恵まれ、戦略的に良い位置にありました。

エペソは国際的な町であり、さまざまな文化と宗教が燃え上がり、溶け合う場所でした。エペソは女神アルテミスと、古代の七不思議の一つに数えられたその巨大な神殿によって、広く知られていました。神々の崇拝、オカルト、魔術は、この町だけでなく小アジア全体で重要な役割を果たしていました。

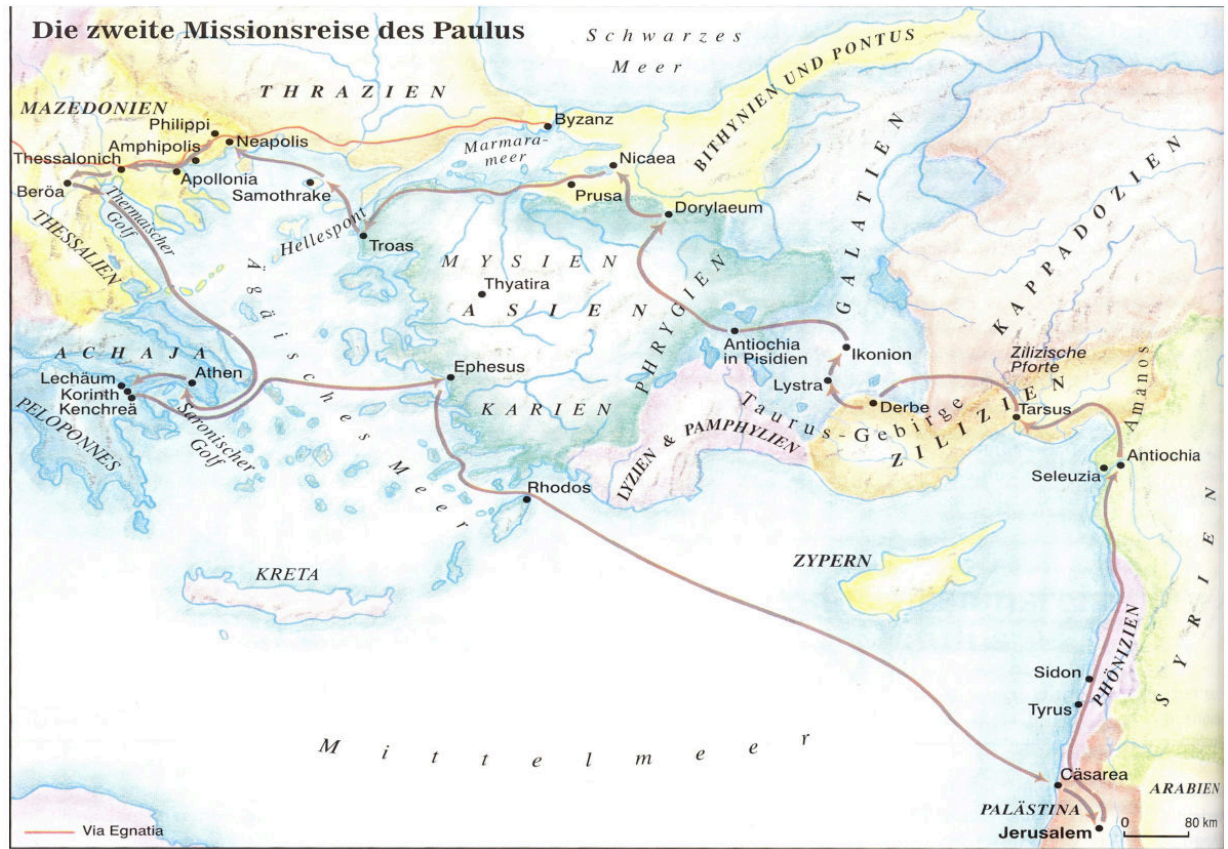
この背景を考えると、手紙のいくつかの箇所が特によく理解できます。全体として、この手紙の執筆のきっかけは、まさにこの靈的・宗教的な背景にあるように思われます。

19世紀には、アルテミス神殿の遺構の探索とともに、エペソの考古学的調査が始まりました。（出典：www.wikipedia.de）

今日エペソは、年間数十万人の訪問者を集めるトルコの観光名所の一つとなっています。

教会という形でのキリスト教の証しは、この町ではもう長い間存在していません。

位置



パウロとエペソ

第二次伝道旅行の終わりに、パウロは初めてエペソに来ましたが、短期間で再びそこを去りました（使徒18:19-21）。その後、第三次伝道旅行（使徒18:23-21:16）で彼はエペソに行き、そこに3年間とどまって働きました（使徒20:31）。主がそこで彼のために大きな働きを用意しておられたからです。そこから彼は、およそ54年と55年に、コリント人への二通の手紙を書きました。エペソ人への手紙は、ピリピ人、コロサイ人、そしてピレモンへの手紙と同様に、ローマから（ひょっとするとすでにカイサリアから）、つまり最初のローマでの獄中生活の間、およそ60年から62年に書かれました。これらの手紙はみな彼の獄中生活に触れています。手紙を届けたのはティキコでした（エペソ6:21-22）。

小アジア全体とその先に至るための橋頭堡としてのエペソでのパウロの働きは、豊かな祝福をもたらしました。「これが二年間続いたので、アジアに住む人々は皆、ユダヤ人もギリシア人も、主のことばを聞いた。また神はパウロの手によって、並外れた力あるわざを行われた。それで、彼の体から汗ふきや前掛けを取って病人に当てると、病気が去り、悪霊が出て行くほどであった」（使徒19:10-12）。

そして、「こうして主のことばは力強く広まり、勢いを増していった」（使徒19:20）。この関連で、エペソの長老たちに対するパウロの告別説教はたいへん示唆に富んでいます。彼はそこで、何年にもわたる滞在と奉仕を思い起こさせ、自分の働きを描写しているからです。使徒の働き20章17-38節。

テモテとエペソ

テモテが何度もエペソにいたことは疑いありません。一度は、パウロによってそこに残されました（テモテ第一1:3）。テモテへの第一の手紙は（第二の手紙も）、テモテがエペソにいたので、エペソに送られました。この手紙から、そこには偽りの教え（グノーシス、律法主義など）の問題があり、彼がそれに取り組むべきであったことがわかります。

歴史的、あるいは教会の伝承は、テモテをエペソの監督（司教）としています。

使徒ヨハネとエペソ

使徒ヨハネについては、長い間エペソに住んでいたと言われていました。それを示す聖書の証拠となる箇所はありませんが、同時代の証人たちの証言があります。古代教会の伝承には、ヨハネが非常に高齢になってから小アジアで死んだという報告があります。殉教者ユスティノス（Justin der Märtyrer）は2世紀半ばに、「使徒の一人であるヨハネ」が「私たちのところに」（つまりエペソに）住んでいた証人であると報告しています。小アジア出身のエイレナイオス（Irenäus、2世紀後半）は、多くの箇所で小アジアに住んでいた使徒ヨハネについて語り、ヨハネがエペソで福音書を書き、トラヤヌス（Trajan）帝の治世までそこに住んでいたと明言しています。

黙示録にあるエペソの教会への手紙をはじめ、ヨハネによる他のすべての諸教会への手紙は、彼の活動範囲が小アジアにあったことを証しています。

さらに別の教会の（カトリックの！）伝承によれば、ヨハネはイエスの母マリアや他の女性たちと共に、エルサレム滅亡の前にエペソに移り住んだとされています。

注目すべきは、パウロがテモテに危険なグノーシスの教えについて書いており、その教えはヨハネも自分の手紙の中で戦っているという事実です。

結論：エペソの大都市の教会は、二人の使徒の滞在、また彼らの使者、同労者、弟子たちの滞在、アポロやアキラとプリスキラ夫妻のような人物、そして（新約聖書正典の完結前に）彼らが受け取った手紙によって、特別に恵まれ、育てられていました。

紀元431年には、エペソで教会の第3回公会議が開かれ、その決定は今日でも認められています。それにもかかわらず、残念ながらキリスト教の証しは何も残っていません。

手紙の執筆のきっかけ

一般に、例えばコリント人への手紙やガラテヤ人への手紙にははっきり見て取れるような特別なきっかけは、この手紙にはないと言われますが、それは正しいでしょう。これは一般的な手紙であり、特に個人的な事柄には触れない一種の回状ですが、広範で体系的な教えを含んでいます。この手紙は、ほかのどの手紙にもまさって、教会すなわちキリストのからだについての教え、またかしらであるキリストと、キリスト者の天的な立場についての教えを展開しています。エペソは商業や金融の中心地であっただけでなく、密儀宗教、偶像礼拝、オカルト、魔術の中心地でもありました。人々の生活はそれによって支配されていました。パウロが何度も言及している霊的な力が、支配的な役割を果たしていました。人々はこれらの力を呼び出し、自分の利益のために影響を及ぼしてもらおうとしました。そのため、それらの影響はいたるところに及んでいましたが、助けとなるよりもはるかに脅威となるものでした。ですから、もう一つのきっかけは、エペソの信者たち、ひいては小アジア全体の信者たちに、これらの力について教えることにあったと考えられます。その目的は、彼らがもはやそれらの力を恐れることなく（ましてやその何かを新しい信仰に取り入れることなく。この点についてはコロサイ人への手紙を参照）、しかも、いたるところに及ぶその悪魔的な影響に対しては警戒している（霊的戦い）ようにすることでした。偽りの教えや異なる教えに対しても警告が与えられていますが、（コロサイ人への手紙のように）それらが詳しく説明されることはありません。

手紙の内容と構成

パウロは、神の永遠の御計画と目的を明らかにします。それは、キリスト一人となられた神の御子一人と、個々の信者、そして教会を含むものです。この神の御計画を目標へと導くために、キリストは死んでよみがえらなければなりません。今信じている者たちは、かつては罪の中に死んでいたので、彼らは新しい人とされ、神の臨在と神の未来にふさわしい者とされます。今すでに、神の永遠の御計画は、現在という時の中で、信者たちと教会の生活において見えるものとなっています。

この手紙は、ほかのどの手紙にもまさって、キリスト教信仰の本質を描き出しています。この信仰は、死んで、よみがえり、神の右に王座に就かれた神の御子に基づいています。一人の人が天で神のもとに、その右におられるので、人々はそこにいることができるのです。今すでに主の内にあって、そしてやがて主と共に。主の内にあって私たちはそこに、天上にいます。個人として、また教会として、永遠にキリストと切り離しがたく結ばれています。

手紙の構成：

第1部：1-3章 教理的（教義的）部分 キリストにある救いの立場 — 救いの直説法	
1章	
1-14節	神への賛美と礼拝：神がご自身のために計画し、行われること、また神が私たちに与えてくださったもの。宇宙に対する神の目的：かしらであるキリストと、その中での私たちの分
15-23節	私たちが知ることを許されていること：まず神ご自身、次に私たちのうちにある神の相続財産、将来、そして生かす神の力
2章	
1-10節	かつてと今 — 神の救い：霊的な死から、天上におけるキリストにある新しい救いの立場へ
11-22節	もはやユダヤ人と異邦人の隔てはない：両者は一人の新しい人、神の新しい神殿となる
3章	
1-13節	異邦人の使徒の特別な務め：新約の教会、神の永遠の目的としての「新しい」神の民
14-21節	私たちが常に、そして何よりもまず祈るべきこと：御霊の力、イエスの愛、神の満ちあふれる豊かさについてのとりなしと賛美
第2部：4-6章 実践的部分 — 信者の生活 新しい人の生活 — 救いの命令法	
4章	
1-16節	一致への勧め：からだの賜物と肢体、そしてからだである教会の成長
17-32節	新しい人：信者のまったく異なる生活
5章	

1-21節	神の子どもとしての生活：世と対照的に、神に倣う者としてのことばと歩み
22-33節	キリストと教会：夫と妻の関係の模範
6章	
1-9節	親と子 — 奴隷と主人
10-24節：	神の武具：霊的戦い

テーマ群

ここからは、テーマの重点ごとに、エペソ人への手紙の本文を扱います。続いて、いくつかの用語についての補説を置きます。それらの用語は一度以上出てくるもので、いずれにせよこの手紙に特徴的なものであり、手紙の内容、目標、意図を示しています。それらは手紙を理解するための鍵となります。

天上 — それは地上からどれほど離れているのか

（「天の一片、神のもとの一つの場所」）

「天にある [所]」（ギリシア語：ἐπουρανίους *epouraniois*、複数形）という用語は、この手紙のメッセージの中心的な表現です。それは、あらゆる力の中心である神の御座から、私たちの日常生活の中にまで直接届いています。

この表現はこの手紙にしか現れません。それはおそらく、アルテミス／ディアナの偶像礼拝やその他の祭儀（魔術、呪術、オカルト）の中心地であったエペソの特別な宗教的状況と関係があるのでしょう。

今日私たちは二つの天しか区別しません。一つは神が住まわれる場所としての天（目に見えない、私たちが生きている次元とは別の次元）、もう一つは空としての天、つまり大気圏や、天体のある宇宙（目に見える）です。

この手紙の最初の読者たち、異邦人とユダヤ人は、天をいくつかの段階（たいていは三つまたは七つ）からなるものとして知っていました。そこにはさまざまな霊的存在（御使い、悪霊、諸力など）が住んでいると考えられていました。これは原則として、聖書すなわち旧約聖書の啓示とは何の関係もなく、広く行き渡っていた神々への信仰や、ユダヤ教内部をも含む特殊な、あるいは極端な信仰の流れと関係していました。パウロはこの信仰あるいは考え方を退けることなく、既定の現実として前提にしています。ただし、それについてさらなる知識を伝えることはしていません。

パウロが言っているのは、目に見えない天が、一方では神の御座のある場所であり、同時に霊の世界の領域でもあるということです。私たちが天上にいる悪の霊どもと霊的な戦いをしている（エペソ6:12）と彼が言うとき、この戦いは地上で、すなわちきわめて具体的に私たちの日常生活の中で行われているのです。

ここでも、天上が神の統治の御座のある場所から私たちの生活の中にまで及んでいることがはっきりします。目に見えない天というこの別の次元、この霊的な現実、私たちが生きている次元と交差し、浸透し、あるいは重なり合っています。目に見えない世界にとっては、見えるものと見えないものとのこの区別は存在しないように思われます。言い換えれば、これらの天上の所は、ある意味で私たちのすぐ近くにもあるのです。

ですから、この用語は非常に包括的です。一方では神の御座であり、他方では、霊的で目に見えない力が留まっている、私たちを取り巻く空中の大気です（エペソ2:2）。

パウロは「天にある [所]」という用語を五回用いており、そのたびに新しい側面を開いています：

1. 1章3節は、（ただ）そこで霊的な祝福の富が与えられ、受け取られることを語っています。
2. 1章20節は、キリストがそこで神の右に、神の御座に着いておられることを示しています。この御座は天上の中心であり、「天上の一方の端」を示しています。
3. 2章6節は、私たちもキリストと結ばれ、「キリストにある」ので、そこに移されていることを明らかにしています。そこにいなければ、私たちは祝福を受けることができないでしょう。そこが私たちの本当の住まい、私たちの将来の希望の真髄です。しかしここで問題になっているのは「今」です。つまり、私たちはまだ地上に生きているにもかかわらず、すでに今占めている立場、地位のことです。
4. 3章10節は、個々の信者が（一人の個人として）そこにいだけでなく、教会全体が（団体として）そこにいて、そこで御使いたちに見られていることを付け加えています。それは、目に見えない世界、とりわけ神から離反した世界に対する、神の救いのみわざの証示としてです。
5. 6章12節は、天にある領域で、悪魔とその使いたち（悪霊）と私たちとの間に戦いがあることを明らかにしています。彼らはその悪しきわざを、この世で、地上で行っています。天的な領域は、いわば私たちが生きている領域と交差しており、そこでこの戦いが行われています。目に見えない世界が目に見える世界に、天が地に及ぼす影響は、強大で、今まさに働いているものです。

これらの聖句から、一方では神のすぐ近く、神の住まい、神の御座の場所が問題になっていることがわかります。「天にある [所] **において**」（… ἐν τοῖς ἐπουρανίοις **en tois epouraniois**）という表現は、この手紙にしか出てきません。これは場所を示すものであり、そのことは「所」（あるいは、領域、境域、地域、天の世界）という補足語によって明確にされます — この補足語はギリシア語本文にはありません。「天のものたちの中に」と訳すこともできます。同じように、これはある事柄のあり方、性格をも示しています。祝福は天上の所にあるだけでなく、それ自体が「天的」なのです。

この用語にはまた対比も含まれています。すなわち天と地の対比、そして**見えるものと見えないもの**の対比です。私たちににとっては、おそらく後者が、この抽象的な用語を理解するための最も簡単な入り口でしょう。もっとも、それがこの用語の唯一の側面ではありません。イエスは「天に

上げられた」ととき、弟子たちの目の前で取り去られました（使徒1:9）。言い換えれば、主は見えなくなったのです。ここで問題なのは、イエスが遠く離れた場所へ出かけて行かれたということではなく、目に見えない天の世界へ、神の御座へと姿を消されたということです。

「靈的祝福」という用語が、パウロを「天上において」という用語へと導きます。この関連は決して偶然ではありません。昔のイスラエルはいと高き方の祝福を受けました。それも地上の祝福です。自分の土地、豊かな収穫、子孫、健康です。

しかし今問題になっているのは、以前にはなかった祝福、また人間によっては到達できない祝福です。以前は地上に祝福がありました。今は天に祝福があります。つまり天的な祝福です。そしてそれは、私たちがその祝福を受けるべきであるなら、そこにいなければならないということを意味します。そしてまさにそれこそ、「天上の所」という表現に込められているメッセージなのです。天は私たちに向かって開かれています。そこが私たちの場所、私たちの故郷、私たちの住まいです。私たちはイスラエルとは違って、天の民です。神は私たちをご自分のもとに置きたいと願っておられ、そこへの道は、よみがえって栄光を受けられた神の子であり人の子である方によって開かれています。この方は私たちを神のもとに導いてくださいました。それは罪責の問題を解決するためだけでなく、私たちを神の御心のふところへ、家へと連れ帰るためでした。放蕩息子のように、私たちは天の父によってその家に迎え入れられ、そこで父の持つておられるすべてのものを贈られるのです（ルカ15:11-32）。私たちは息子として受け入れられ、迎え入れられ、息子として相続人とされています。父の持つておられるものはすべて私たちのものなのです。

なぜ靈的な祝福は、ほかでもない「天のものたちの中で」私たちに与えられるのでしょうか。それは、神の願いによれば、私たちは栄光を受けられた天のキリストがおられる所にいるべきだからです。私たちは主と、個人として、また主のからだである教会として共に、永遠に切り離しがたく結ばれています。

その際、私たちはいつまでも人間であり続けます。神のかたちに造られた者です。しかし、キリストにおける神の介入によって、私たちはいつの日か天に属する方のかたちを持つようになり、そのとき私たちも天に属する者となるのです（コリント第一15:48-49）。いつもこの領域に属していた存在がいます。この手紙では、彼らは権威や支配と呼ばれています。それは御使いたち（ピリピ2:10）、天的な存在です。私たちは地上的な存在ですが、キリストによって天に属する者となり、キリストと同じようになります。これは決して御使いたちには当てはまりません。

キリスト者の天的な本質を強調しているのは、エペソ人への手紙だけではなく、教会が天の民であるということは、新約聖書全体の啓示なのです：

- 神の御子は、私たちに天のこと（ $\tau\acute{\alpha}\grave{\epsilon}\pi\omicron\upsilon\rho\acute{\alpha}\nu\iota\alpha$ ）を明らかにするために来られました。それは以前には知られておらず、天から来られた神の御子ご自身によってしか伝えることのできないものでした（ヨハネ3:12）
- 私たちは、私たちの主イエス・キリストの天の御国（ $\epsilon\iota\varsigma\ \tau\eta\grave{\nu}\ \beta\alpha\sigma\iota\lambda\epsilon\acute{\iota}\alpha\nu\ \alpha\upsilon\tau\omicron\upsilon\tau\eta\grave{\nu}\ \epsilon\pi\omicron\upsilon\rho\acute{\alpha}\nu\iota\omicron\nu$ ／…その天の御国の中へ）にあずかっています（テモテ第二4:18）

- 私たちは**天の召し**（*κλησεως ἐπουρανίου μέτοχοι*）の中に立っています。**天から天のために召されている**のです（ヘブル3:1）
- 私たちは**天からの賜物**（*τῆς δωρεᾶς τῆς ἐπουρανίου*）を受けており、それを味わう、つまり楽しんでいます（ヘブル6:4）
- 族長たちはすでに**天の**（*τοῦ τ' ἔσθιν ἐπουρανίου*）**故郷**（*πατρίδα*）を求めていました（*ἐπιζητοῦσιν*、探し求めた、待ち望んだ）。まして私たちはなおさらです（ヘブル11:13-16）
- 私たちは**天に国籍**を持っています（ピリピ3:20）
- （*τοῦ πολίτευμα ἐν οὐρανοῖς ὑπάρχει*）
- 私たちには**天に蓄えられている望み**があります（コロサイ1:5）
- （*διὰ τὴν ἐλπίδα τὴν ἀποκειμένην ὑμῖν ἐν τοῖς οὐρανοῖς,*）
- 私たちは**上にあるもの、キリストがおられる所**にあるものを思います（コロサイ3:1-4）
- => 朽ちることのない**資産**が、私たちのために**天に蓄えられています**（ペテロ第一1:4）
τετηρημένην ἐν οὐρανοῖς
- 私たちは目で見えるものではなく、信仰によって心の目で見えるもの、一時的ではなく**永遠に続く事柄**に目を留めます。問題なのは**永遠の重い栄光**です（コリント第二4:16-18）
- 私たちは心の目で、（まだ目に見えない）**天におけるキリストの栄光**を見つめています（コリント第二3:18、使徒7:55）

天は開かれている…… 新約聖書の**まさに**メッセージはこうです。私たち人間、特に異邦人にとって神が隠されていた**天**が、今や開かれている（イエスが死なれたとき神殿の幕が裂けた）。そして、地上のユダヤ人の聖所ではなく、**天の聖所への道が開かれている**のです。

天のはしごのように…… 同じように新約聖書のメッセージはこうです。神は天から御子においてご自身を現し、ありのままのご自身を示されます。それは地と天を結ぶ**天のはしご**のようであり、どちらの方向にも行き来することができます（ヨハネ1:51、創世記28:12）。神が私たちのところに来られ、私たちは神のもとに行きます。この手紙で私たちは神の御座まで見上げます。その御座で私たちの主は最高の栄誉の座を占めておられますが、同時に、まだ地上にいる私たちのうちに住んでおられます（エペソ3:17）。そしてこの意味で、私たちはまだ地上にいる者として、霊的な祝福を持っているのです。天上の所は、いわばあらゆる祝福とともに私たちの心の中にあります。ですから、この天上の所はすぐ近くにあり、何光年も離れた所にあるものではありません。

天に移されて……キリストにあって……そこで主の内に

私たちは信者として、キリストにあってそこに移されています。「キリストにあって」は、(まだ)「キリストと共に」ではありません。「キリストにあって」は、私たちが主の内に持っている位置、あるいは立場を表しています。つまり、神は私たちをキリストにある者として見ておられるので、私たちはすでにそこで主の内におり、神の御座における主の勝利の立場にあずかっているのです。私たちの救いの立場が、これ以上高く、これ以上確かであることはありません。

私たちを文字どおり、からだをもってもその場所に置きたいと願っておられる神にとって、このことはすでに今、真実です。なぜなら、神の目的においては、目標に到達する前から、その成就がすでに保証されているからです。

空間と時間の中で考える私たちにとって、今すでに天上にいるということを思い描くのは難しいので、例を一つ挙げて説明しましょう：

選挙で選ばれた国民の代表は、議会で国民の利益を代表します。ですから、彼を選んだ人々は、いわばこの代表者の内にあって議会に出席し、代表されているのです。同じように、私たちはキリストによって、またキリストにあって、天において御座のもとに、力の中心において、代表され、代理されているのです。

もう一つ、実際に天上でどのように生きるのかを示す例を挙げます：

ある種の水グモは水中に住んでいますが、水面から水中へ持ち込んだ空気の泡の中で、あるいはその泡から呼吸しています。同じように、私たちはすでにここで、キリストが満たしておられるこの天の世界から／の中で／によって生きているのです。もちろん、そのような生活の条件は、天にあるものを求め、天にある事柄を知ることです。

隔ては取り除かれている……

見える世界と見えない世界、地と天上との隔ては、信者にとってはすでに今取り除かれています。彼らは御父に近づくことができるのです。キリストが万物のかしらとなられる来たるべき時代には、この隔ては全世界的にも終わりを迎えます。

エペソの人々のかつての神々への信仰……

エペソの人々の古い信仰では、天上は神々の勢力圏であり、神々が彼らの生活に影響を与え、それを決定していました。それは敵対的な存在で、その力が勝っているために、人々はなすすべもなく彼らの手に委ねられていました。目に見えない世界は、一方では危険なものでした。そこで何が起きているのか、はっきりとはわからなかったからです。この領域は大きな意味と魅力を持っており、神々は自分の目標を達成するために助けてくれるはずのものでした。オカルトや魔術、また呪文によって、神々を従わせようとしたのです。この恐れから、エペソの人々は今や解放されていました。それどころか、彼らはこの領域に移されていましたが、そこにいる諸力の上に高く上げられていたのです。キリストにあって、彼らは力の中心に移されていました。諸力はもは

や彼らに害を加えることができませんでした。こうして彼らは諸力の上に立っていただけでなく、人々の考えによれば人間の運命を決定していた星々の上にも立っていたのです。

天上にある霊的祝福：それは何か

神に祝福されること以上に、何を望むことができるでしょうか。神はそうしてくださり、私たちを祝福してくださいました。これが私たちの神です。この方のような方はほかにいません。

その祝福は霊的で天的な性質のものです。こうして、この祝福は地上的、物質的な祝福と対比されています。それは天において与えられるのです。

では、私たちには地上の祝福はないのでしょうか。もちろん私たちには地上の祝福もあります。私たちの天の父は、すべての人の、特に信者の保護者です（テモテ第一4:10）。しかし地上の祝福は（そして残念ながら私たちは時に、それを豊かさを取り違えてしまいます）、私たちに約束されたり保証されたりしてはいません。私たちはそれを当然の権利として主張することはできません。食べる物と着る物があれば、私たちは感謝すべきです — それが地上の祝福です（テモテ第一6:8）。私たちはのろいの下にある、墮落した被造世界に生きています。霊的祝福は、のろいや罪の結果を取り除くものではなく、私たちの心を変え、満たすものです。

霊的祝福は豊かに、あふれるほどにあります。私たちには**あらゆる**祝福が与えられているのです。これは、食べることや飲むこと、そして地上のあらゆる富を超える、とてつもない真理です。それまで人間には到達できなかったものが、今や私たちの所有となります。天の栄光、富、愛、清さ、いのちを形づくっているものが、今やキリストにあって私たちに与えられているのです。私たちの主イエス・キリストの父なる神は、よみがえって王座に就かれた人の子であるキリストにあって、私たちに天の栄光の中にある祝福にあずからせてくださいます。**栄光を受けた一人の人が天にいて、私たちのために道を開き、私たちを神の天の宝物庫へ連れて行ってくださるのです。**

そこにある**あらゆる**霊的祝福が、私たちの所有となりました。ただキリストにあってのみ、私たちは、人間が決して夢見ることさえできなかったものを受け取るのです。神はご自分のひとり子をささげ、私たちのためにこの方を惜しまれませんでした。神は御子と共に、考えうるあらゆる祝福に満ちたものを私たちに与えてくださるでしょう（ローマ8:32）。

しかし私たちは、パウロがほかでもないここで語っている、キリストにあって私たちに与えられている祝福と天の宝とは何であるかを知っているのでしょうか。

パウロが祝福についての言明を、内容の要約のように手紙の冒頭に直接置いているのなら、私たちもまずこの手紙の中で祝福を探し、それから手紙を越えて新約聖書の中に並行箇所やさらなる祝福を探すべきでしょう。探すにあたって、私たちは、神が私たちに何をしてくださったか、私たちが何者としてくださったかということと、私たちが受け取ったものとを区別します。一方は宝への道であり入り口、もう一方は宝そのものです。

この並外れた手紙を巡り歩く中で、私たちは目を見張るような祝福に出会います。カナンを偵察した斥候たちも、時に自分の目を疑いました（民数記13章）。農作物の豊かさは目を見張るものでした。それが本当に彼らのものになるはずだったのです。**エペソ人への手紙の中で私たちが見い**

だすものは、今ここで私たちのものです。例外なくすべてがそうです。たとえ祝福の一部は将来になって初めて手に入れるものであってもです。私たちは特別な祝福を待っているのではなく、それを所有しているのです。けれども、手を伸ばし、探し、見つめ、楽しむことが求められています。それは、その富によって、私たちが将来になって初めてではなく今すでに神の子として富んでいるのだという自覚を持つためです。私たちは自分の相続財産を知るべきです。「しかし、あなたは富んでいる」と、キリストは、物質的な価値においては貧しかったスミルナの教会に言われます（黙示録2:9）。ここで問題なのは霊的な富であって、お金や家や車ではありません。神が与えてくださった富を知るとは、私たちの日々の信仰生活にとって大きな意味があります。自分がすでに大きな富の所有者であり相続人であることを知らず、なおも貧困の中で暮らしている人にとって、それが何の役に立つのでしょうか。もしそれを知っていたなら、その人の考え方も、生き方も、希望もまったく違ったものになるでしょう。だからこそパウロは（この手紙の中で二度：1章15-18節、3章14-19節）、私たちの心の目が開かれて祝福を知ると、これほど熱心に祈っているのです。神は私たちに、細々とした狭いキリスト者生活を定めてはおられません。神は本気で、私たちがキリストの満ちあふれる豊かさと測り知れない富の中で生きようと願っておられるのです。外面的な貧しさや、同時に迫害を受けることさえ、それと矛盾するものではありません。信仰と希望の原則が当てはまります。すでに今 — しかしまだ！ けれども、やがて「まだ」は終わり、私たちはキリストと共に相続財産を受け継ぐのです。

いわゆる繁栄の福音は矛盾しています。それは霊的な祝福と地上の祝福を取り違えているか、あるいは天を先取りしているからです。敬虔は物質的、経済的な利得の手段ではありません。

では、探索を始めましょう。11節には、私たちが**相続財産**を得たと書かれています。私たちは神の息子として、また神の子どもとして、神の相続人となりました（ローマ8:17、ヤコブ2:5）。相続財産とは何でしょうか。まず問題なのはキリストです。神は万物の相続者としてこの方を万物の上に置かれます（ヘブル1:2）。この方はすでに今、万物の上に高くおられますが、それはやがて明らかに、つまり全被造物の目に見えるものとなります。栄光の中でのこの支配に、私たちは分を持っています。私たちはそのすぐそばにいます。私たちは教会として主のからだであり、万物の管理がこのからだに委ねられます。これは将来の祝福ですが、私たちはすでに今その手付金を持っています。私たちはこの栄光の地平の前に生きています。下り坂ではなく上り坂なのです。

相続財産と結びついて、さらにもう一つの天的な祝福があります。それは**聖霊**です。聖霊は、相続財産を確保し、それを受け取るための保証であり手付金です（エペソ1:13-14）。ですから御霊は私たちの所有であり、知恵と啓示の御霊として私たちに与えられています（エペソ1:17）。御霊は私たちを富に親しませてくださいます。そして御霊こそ、私たちを御父のもとへ導いてくださる方です（エペソ2:18）。私たちの内なる人を強めてくださるのは御霊です。つまりこれは、日々経験できる祝福なのです（エペソ3:16、4:23、30、5:18、6:18、17も参照）。キリストのからの交わりを生み出し、それを生かし、それに浸透しているのは神の御霊です（エペソ4:3）。この祝福は物ではなく人格、神的人格なのです。

聖霊は天から遣わされた方であり、私たちを神の真理へと導き入れてくださいます。それは、神が私たちに与えてくださったものを私たちが知る（ようになる）ためです（コリント第一2:12、

ヨハネ16:13、14:17)。この手紙の中で聖霊は13回言及されており、それはやはりそれ相応の注意を払うことを求めています。聖霊はご自身が私たちにとって天からの賜物であり、同時に、心の目に天の事柄を開いてくださる方でもあります。

この御霊が私たちの内に住んでおられるという現実、事実は、抽象的な教理ではなく、霊的な生活の現実です。私たちがイエスの御霊に場所を明け渡すなら、それは私たちの生活のあらゆる行い、あらゆる出来事を共に決定し、それに浸透することができるのです。主に場所が与えられる所だけ、主はその場所を満たすことがおできになります。私たちは御霊を持っています。しかし御霊もまた私たちを持つべきなのです！

聖霊と結びついて、さらにもう一つの天的な祝福が私たちの所有となりました。**御父の息子として御父に近づくことができること、そして御父との交わり**です。この方、すなわち御霊によって、今やユダヤ人と異邦人は共に御父に近づくことができます（エペソ2:18、3:12）。これは霊的であり、かつ天的な祝福です。私たちはこれを信仰によって経験するので、霊的です。それは天に住んでおられる私たちの天の父のことなので、天的です。この「場所」で、私たちは主のみもとに進み出ます。特にかつての罪人という視点から見ると、私たちが恐れなく、息子として完全に受け入れられているという自覚をもって御父の前に進み出ることを許されているというのは、息をのむようなことです。これは神に向かって悔い改める瞬間のことではありません。これは絶えず与えられている特権です。そこで私たちは共通の関心事を分かち合います。御父の愛する御子に心を向けることは、その一つです。そこで私たちは自分の生活を、あらゆる喜びも、あらゆる苦しみも、広げて差し出すことが許されています。そこで私たちは慰めと励ましを経験します。そこで私たちは折にかなった恵みを見いだします。

御父と御子との交わりは、特に使徒ヨハネがその福音書と手紙の中で描いています。私たちは御子の内に、永遠のいのち、天のいのち、父の家のいのちを持っているのです。

信者の交わりは天的な祝福です。それは御霊によって造られた天の民です。すべての信者は同じいのちを分かち合い、同じ目標を持っています。この結びつき、一つのからだ、一つの家における神の子どもたちのこの一致は、神の永遠の、したがって天的な計画でした。彼らは同じいのちを分かち合い、天的なものと結ばれています。信者たちが互いに心からの交わりを持ち、愛をもって接し合い、霊とたましいとからだにおいて助け合い、支え合うなら、それは天の一片です。悪魔は、教会の中の不和によって、この祝福、すなわちこの祝福を享受することを奪い取ることができます。

祝福は私たちの実際的な益となるべきものです。私たちの富を探り、体験することに本気で取り組みましょう。自分たちが赦された罪人であるという認識の所で立ち止まらず、さらに進んで、キリストにある私たちの救いの立場を知り、その意味で「主にあって堅く立つ」ようにしましょう。悪魔の戦術は、私たちの目をそこからそらさせ、私たちが断念しなければならないことや困難だけを見るようにさせることです。特に、ひょっとすると私たちよりも暮らし向きが良く、自分の望むままに生き、行動できる周りの人々と比べさせることによってです。そのようなものの見方は私たちをすり減らし、本来持っているはずの喜びを奪ってしまいます。イスラエルのように、自分たちのものとされた地を実際に征服しようではありませんか。これが神のみこころで

す。神があなたに与えてくださったものを自分のものとしなさい！ あなたがなったものとして存在し、そのように生きなさい！

選び（予定）：ただの論争テーマか

手紙の冒頭ですぐに、エペソの人々は世界の基が据えられる前から選ばれており（エペソ1:4）、子とされるようにあらかじめ定められている（エペソ1:5）と語られています。選びと予定は、この文脈では互いに近い関係にあります。前者は選び出すことを表し、後者は具体的な意図を表しますが、その意図に選び出しが先立つこともあります。

このテーマについての本で、図書館を丸ごと一つ埋めることができるでしょう。論争点は、よく知られているように、人間の自由意志と神の主権をめぐる議論にあります。この議論が袋小路に陥るのは、たいてい「あれか、これか」という議論として行われるからです。人を悔い改めに導くのは神の主権的な選びなのか、それとも、福音に語りかけられて悔い改める人間の自由な決断、あるいは選択なのか、というわけです。

私たちが認めなければならないのは、私たちには説明できない、つまり私たち（の理性）にとっては思い描くのが難しい聖書の真理が少なからずあるということです。それは例えば、神であると同時に人であったイエスという方に関わります。また、神は唯一でありながら、三つの位格、すなわち父、子、聖霊であるという事実にも関わります。しかし、神の子どもとしての私たちの認識の限界は、実存的な人生の問いにも関わります。例えば苦しみの問題です。それはひょっとすると私たち自身の生活の中の苦しみかもしれませんが、いずれにせよ世界にある、本人に責任のない苦しみの問題です。

あらかじめの選びというテーマについても同じことが言えます。選ばれた人々と、そうでない人々がいるということが、どうしてありうるのでしょうか。もし私たちが神による限定的な選びという立場を取るなら、それならなぜ福音がすべての人に宣べ伝えられるべきなのか、と正当に反論されるでしょう。他方、もし私たちが、誰もが自由な選択によって回心できるという立場を取るなら、選びはまったく、あるいはほとんど意味をなさなくなります。

選びは、罪人の信仰の決断を不要にするものではありません。選びがあるにもかかわらず、罪人は悔い改めと信仰へと招かれているのです。

私は次のことを学び、それを自分の確信とすることを許されました。人間の責任と、選びにおける主権者なる神の働きとは、互いに排除し合うものではなく、同時に存在しているのです。とはいえ、一見矛盾する二つの要素が同時に存在するというこの緊張が、それによって説明されたり解消されたりするわけではありません。私たちの個人的な信仰生活における多くの問いについてもそうであるように、この緊張に私たちは耐えなければならないのです。

ここで問題なのは私たちの神の偉大さであって、私たちの理性の偉大さではありません。

一つのたとえが役に立つかもしれません。鉄道の線路は二本のレールからなり、それらは常に平行に走っていなければならない、決して交わることはありません。神がその選びを行われる神の主権もそうであり、回心しなければならない人間の責任もそうです。線路は救済史を表す象徴であ

り、そこにはまさにこの二つの側面が常に見られます。神がどのようにしてご自分の目標に到達されるのか、しかも神が栄光をお受けになり、誰も決して神を責めることができないような仕方です。地平線の所で、ルールは一つに合わさります。同じように終わりの時には、神がこの奥義をも明かされ、完全なものが来るのです。そのとき私たちは、神のなさることをはるかによく理解するでしょう（コリント第一13:9-10）。

この二つの側面は、イエス・キリストの受難にも見られます。一方では、イエスの殺害に直接、間接に関わったすべての人の全面的な責任があります。もう一方は、ご自分の御子を神の子羊として、罪のためのいけにえとしてささげられた神のみわざです。これが神の知恵です。殺害者たちは、神の計画を引き合いに出して言い逃れることはできません。彼らはイエス殺害に対して全面的に責任があります。しかし、イエスのいけにえのゆえに殺害者たちでさえ赦されうるということは、神の限りない恵みなのです！

C・H・マッキントッシュ（C.H. Mackintosh）は、一方的な強調 — それが神の主権の強調であれ、人間の責任の強調であれ — を、片方の翼しかない鳥や、一本のオールだけで進ませようとするボートにたとえました。私たちは、この二つの極の間にある緊張を解消することはできません。それは、私たちが光の中に入るまで残ります。この緊張を解消しようとするよりも、私たちは神の恵みのとてつもない力を自分に働かせ、それによって満たされるべきです。それは大きな励ましと勇気づけであり、失われた人々への熱意の中にも見えるものとならなければなりません。

私たちは世の中から選び出されています（ヨハネ15:19）。神の選びは、世の弱い者や貧しい者を優先します（コリント第一1:27-28、ヤコブ2:5）。それゆえ私たちは恵みの御計画について語ることができるのです。神に選ばれた人々は、神の特別な保護を享受しています（ローマ8:33）。彼らにはまた特別な義務もあります（コロサイ3:12）。私たちは個々の被造物として選ばれていますが（ヨハネ1:13）、教会全体としても選ばれています（エペソ3:8-11、ペテロ第一2:9）。使徒パウロは、テサロニケの人々の間に信仰の働きを見たので、彼らが選ばれていることを確信していました（テサロニケ第一1:4）。私たちの知るかぎり、彼は、誰が救いを得て誰が得ないかという神の永遠の御計画を見通してはいませんでした。むしろ彼は、選ばれた人々が救いを得るために、なおいっそう働いたのです（テモテ第二2:10）。

すべての信者は、すべての時に先立ってすでに神の御心の中で知られており、そのときすでに神にあらかじめ知られ、愛されていたことを喜び、そこから勇気を汲み取ることができるのです。

子とされること（養子）と子であること：単に同じことか

私たちはかつて「不従順の子ら」（エペソ2:2、5:6）であり、「御怒りを受けるべき子ら」（エペソ2:3）でした。今私たちは神の息子です。私たちは子とされるようにあらかじめ定められており（エペソ1:5）、神の「愛されている子ども」（エペソ5:1）だからです。ですから私たちは「光の子ども」（エペソ5:8）として生きることができます。子どもとして、また息子として、私たちは聖霊によって自由に「御父に近づくこと」ができます（エペソ2:18、4:6、5:20）。

パウロの時代、ローマ人の間では、子どもは妻や奴隷と同様に父親の所有物とされていました。成人に達すると、子は息子となり、それとともに相続人となりました。息子としての彼は子どもとは異なる立場にあり、父親と向き合う相手となり、父親の後継者となっていました。ローマ法には息子として迎える養子縁組もあり、それによって養子は相続人とされ、以前の家族との絆はすべて永遠に断ち切られました。

信者は、息子であると同時に子どもでもあります。普通の生活のように、子どもが息子になって、もはや子どもではなくなるというわけではありません。確かに使徒ヨハネはまさにこの成長の過程を示していますが（ヨハネ第一2:13-17）、そこでも、私たちが子どもであると同時に息子であることに変わりはありません。言い換えれば、神の子どもは霊的に成人しているべきなのです。この二つの呼び名は同時に信仰によって所有しているものであり、私たちの父なる神との関係の異なる側面を表しています。

子であることは、誕生、すなわち新生、神から出たいのち、確かさ、相続について語っています（ヨハネ1:12、ローマ8:16-17、21、ヨハネ第一3:1-2、10、4:2）。**子とされること（息子としての身分）**は、受け入れ、すなわち養子縁組、霊的に成人していること、そして同じく相続について語っています。その成り立ちから言えば、人は誕生によって神の子どもとなり、養子縁組によって神の息子となるのです。

息子としての身分は信頼に満ちた関係であり、その中で私たちは神に「アバ、（愛する）父よ」と呼びかけます（ローマ8:15、ガラテヤ4:6）。神は私たちをご自分のための息子として養子にしてくださいました。神は彼らを喜び（エペソ1:5）、彼らとご自分の永遠の計画について語り合うことがおできになります（エペソ1章）。私たちのからだの贖いが、私たちの息子としての身分を完全なものにします（ローマ8:23）。そのとき神の御子が、神ご自身とすべての人によって、私たちの上に、また私たちの内に見られるようになります。さらに、息子としての身分は、神の訓練（ヘブル12:5-7）、聖さ（コリント第二6:17）、律法からの自由（ガラテヤ4:7）、そして今と将来の栄光（ヘブル2:10）と関わっています。

エペソ人への手紙は、神がご自分の息子たちと分かち合おうとしておられる神の永遠の計画を明らかにし、また、御父の唯一無二の御子を永遠の中心として、神が多くの養子とされた息子たち（そして娘たち）と分かち合おうとしておられる神の未来を明らかにしています。

主イエス・キリストは決して「神の子ども」とは呼ばれていません。主は新生を経験されませんでした。主は神の、また御父の永遠の御子です（ヨハネ第二3）。主は常にそうであり、私たちのように養子縁組によってそうなられたのではありません。主は神の御子として、私たちの息子としての身分の模範、「原型」です。私たちはやがて御子のかたちと同じ姿になります。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となるためです（ローマ8:29）。

人としても、主は神の御子です。なぜなら主は、そのような者として、聖霊によって、神によって宿られたのであって、法律上の父であるヨセフによってではないからです。

座る — 歩む — 立つ：神の順序

これは、中国人ウォッチマン・ニー（Watchman Nee）の祝福に満ちた本の一冊の書名です。彼はエペソ人への手紙をもとに、これらの言葉を用いてキリスト者の生活を説明しています。この順序は、エペソ人への手紙が私たちに伝えていることに合致しています。2章に描かれている神の救いのみわざは、私たちを霊的な死からいのちへと導き、キリストにあって神の御座にまで至らせます。そこにキリストは座に着かれました。そして私たちは主の内にいるので、同じことが私たちにも当てはまります。**私たちの救いの立場はキリストにあり、それは、私たちもまた座っていて、神の救いの満ちあふれる豊かさの中で安息に入っていることを含んでいます。**それは、キリストにある救いが完全に私たちに帰せられていることを含んでいます。古いものを終わらせ、新しいものを造り出すために必要だったことは、すべてキリストによって成し遂げられているからです。それは、キリストにあってただ一度で、取り消されることなく私たちに与えられる、満ちた、完全な救いです。手紙の4章からは、1節の見出しが当てはまります。「あなたがたは、召されたその召しにふさわしく歩みなさい！」安息から、確かな救いから、キリスト者の歩みが始まります。歩みは、この立場に到達するための努力ではなく、まさにその逆です。私たちは、自分がただ一度で受け入れられているという確かな知識をもって毎日を生きます。私たちはキリスト者として、救いから出発して生きるのであって、救いに向かって生きるのではありません。ましてや、この救いを失う危険を抱えながら生きるのではありません。この知識の中でのみ、私たちはこの召しによって置かれた責任に、正しく応えることができるのです。

霊的な内なる人の三つ目の「姿勢」として、**立つこと**が来ます。霊的な人は、私たちの地上のからだとは違って、三つの姿勢すべてを同時に取ることができます。霊的な人は常にキリストと共に天上に座っており、この場所をもう二度と離れることはありません！同時に私たちは常に日常生活の中にいて、そこで、救いにおいて私たちが着た新しい人が歩んでいます。最後に来るのが立つこと、堅く立ち続けることです。立つように、つまり堅く立ち、揺るがされないようにという勧めは、私たちが置かれた立場から、私たちが据えられた祝福の満ちあふれる豊かさから、敵とこの世によって追い出されうることを示しています。これは矛盾しているように聞こえます。なぜなら、たった今、この立場は失われることがないと強調したばかりだからです。それは正しいのですが、神の敵である悪魔とその御使いの軍勢がねらっているのは、私たちがこれらの救いの真理の知識と祝福の満ちあふれる豊かさを忘れ、それらがもはや私たちにとって何の意味も持たなくなり、私たちが神を知らないこの世のように生きることなのです。

したがって、**私たちの救いには二つの側面があります。客観的な側面と主観的な側面、救いの直説法と救いの命令法です。**私たちの救いの客観的な側面は、永遠に侵されることがありません。主観的な側面は、私たちが自分の生活の中でそこから何を生み出すか、それを実際に実行するか、この召しに本当にふさわしく歩むかということを含んでいます。そこに「立つこと」が属しています。「立つこと」とは、救いの立場、救いと祝福の満ちあふれる豊かさ（あるいは祝福を享受すること）が、私たちの日常生活の実際の現実となっていることを意味します。

新約の教会：いつから存在するのか（エペソ2章と3章）

この問いは、一見したところ根拠のないもののように思われます。言い換えれば、そもそも意味のある問いなのでしょうか。もちろん、エペソの教会はパウロの宣教活動によって生まれました。エペソの教会は自分たちの誕生の時を知っていました。しかし、世界規模の教会の誕生の時は、その30年前にあります。エルサレムでのペンテコステに、聖霊によるバプテスマによって、新約の教会、イエス・キリストの教会が生まれたのです（コリント第一12:13）。イエスご自身が予告しておられたとおり、すべての信者、散らされていた神の子どもたちが、一つの御霊において、また一つの御霊をもって「飲まされ」ました。それによって彼らはみな御霊によって一つのからだ（霊的なからだ）へと結び合わされ、このからだはキリストのからだとなって、天のかしらと結ばれたのです。

この教会は旧約聖書には存在しませんでした。それはありえないことでした。なぜなら、今や新約の信者において起こっているようには、聖霊が地上の人々の内に住んでおられなかったからです。また旧約の時代には、まだ天のかしら、降って来られ、また上って行かれたキリストはおられませんでした。信者たちが属していた、アダム以来の教会というものは存在しないのです。

しかし、見出しの問いはそれでもまだ完全には答えられていません。パウロは3章の初めで筆の流れを中断し、挿入文を入れています。彼は自分の使徒としての務めの特別さを強調しています。異邦人の使徒、あるいは異邦人のための使徒として（ガラテヤ2:7）、彼は特別な啓示を受けていました。以前には知られていなかったことが、神によって彼に示され、委ねられたのです。彼はこれを「**キリストの奥義**」と呼んでいます。彼はすでにこれを2章で簡潔に述べていました。そこで彼は、神の救いのみわががもはやご自分の地上の民に限られず、すべての人に向けられていることを描いています。その際、異邦人は古い神の民の身分に組み入れられるのではありません — それだけでも大変な祝福であったでしょうが — そうではなく、神が両者から新しいもの、すなわち一人の新しい人と一つの新しい神殿を造り出される様子が描かれているのです。2章ではまだ目立たないことを、パウロは〔3〕章で感情のこもった言葉で描いています。神のこのみわがは、異邦人の、そしてとりわけメシアの死について罪を負っていたユダヤ人の、まったく失われた状況に対する反応ではなく、緊急時の計画でもなく、神の永遠の、主権的な目的なのです。神はすべての時に先立って、教会を造り出すというこの並外れた計画を持っておられました。しかも、すべての人の中から教会を造り出すという計画です。教会に関するこの計画の中に、キリストの富のすべてが展開されるのです。

パウロは、この目的が旧約の時代には一人の人にも知られていなかったと言っています。ですから、旧約聖書の中に教会についての言明を探しても無駄でしょう。予型的、象徴的な言明は確かにありますが、それらは教会が存在するようになって初めて、そのようなものとなりえたのです。

新約の教会が、神とその古い民イスラエルとの歴史の単なる続きではないということには、重要な意味があります。新約の教会は、地上の神の民としてのイスラエルに取って代わるのではなく、イスラエルへの約束を引き継ぐのでもありません。教会は、神の永遠の目的から出た新しいものとして出来事の中に登場するのであり、そのようなものとして、イスラエルの歴史とは直接

の関係がありません。この歴史は中断されているだけ、ある一定の期間とぎれているだけです。この期間は教会の時代であり、この教会が天に携え上げられるまで続きます。神はイスラエルとともにご自分の目標に到達され、ご自分の地上の民についてのすべての約束と預言は成就します。

私たちは、イエスの教会の歴史が終わりに近づいている時代に生きています。イスラエルへの預言が成就するためには、そのような国民がこの地にもいなければなりません。これは、キリスト教会がまだ地上にある間に、すでに成就しました。私たちはすでに一種の過渡期に、聖書の言葉で言えば、終わりの時に生きているのです！

こうしてエペソ人への手紙は教会の天的な立場を確証し、「キリストのからだ」と呼ばれるこの霊的な団体に属すること以上に偉大なものが、神の御手から与えられることはありえないということを明らかにしています。イスラエルについても、ほかのどんな国民や人間の集団についても、このようなことは言われていません。

もう一度、新約の教会とイスラエルとの関係に簡単に立ち返りましょう。神のみわざには連続性があり、また非連続性もあります。つまり、一方では神は、旧約聖書で約束されていたとおりに救済史を前進させておられます。例えば、聖霊の注ぎについてのヨエルのことばは、使徒の働き2章のペンテコステにおいて、先取りの、あるいは部分的な成就を見ました。旧約聖書で予告された新しい契約は、教会を含んでいます。しかし他方で、神は教会とともにまったく新しいことを始めておられます。ここで、ローマ人への手紙に少し寄り道をすることがおそらく役に立つでしょう。11章では、人類の祝福のための神の救いのみわざが、オリーブの木にたとえられています。

オリーブの木は神の祝福の象徴です。それがどのように約束され、誰に与えられるのか、誰がそれを失い、誰がそれを得るのか、そして最後に、かつてそれを失った人々によって再びどのように享受されるのかを表しています。

オリーブの木は、特に神の民イスラエルを表しているのではなく、祝福の領域を示しています。それは族長たちに約束され、キリストにおいて成就する祝福です。イスラエルの民がまず祝福の下にあり、その頂点は、ご自身が族長たちへの祝福そのものであったメシアを受け入れることであったはずでした。そうしたのはい部分の人々だけで、彼らは祝福を受けました。ほかの人々は切り取られました。その少数の人々は、諸国民から出た信者たちと一つにされました。この人々も今や信仰によって族長たちへの祝福にあずかっています。彼らもまた相続人であり、アブラハムの霊的な息子たち、約束の子どもたちです。しかし、もともとの自然の枝は不信仰のままではいません。彼らが救われ、再び接ぎ木され、神の道に立ち返る日が来ます。そのとき彼らは、かつて約束された祝福を、国民として、民族としてのイスラエルとして経験するのです。

ユダヤ人でない信者たちは、イスラエルになるという意味で組み入れられるわけではありません。どうして諸国民がイスラエル人になることなどできるのでしょうか。彼らはその新しい立場において、ユダヤ人の信者たちと同じ祝福を分かち合っていますが、その新しい立場においては、ユダヤ人もギリシア人もないのです（ガラテヤ3:28）。

オリーブの木のたとえは、たとえ神ご自身が考え出されたものであっても、拡大解釈しすぎではありません。オリーブの木は、アブラハム契約から新しい契約に至るまでの、族長たちへの祝福の体系を表しています。木の成長は歴史の進展です。オリーブの木は、歴史を貫く一種の祝福の回廊であり、人は信仰によってその中に入るのです。この回廊は神の多くの思いを含み、教会もその中に含まれます。そしてそれは、神がご自分の御座の隠れたところで主権をもって自ら書いておられる歴史の終わりにまで至ります。

神の満ちあふれる豊かさ：万物の目標

キリストの測り知れない富は、あらゆる堤防を破って全世界にあふれ出します。それは大洪水のように人々を溺れさせるためではなく、人々をこの驚くべきキリストの富で満たし、キリストのからだである教会に植え込み、相続人とするためです。それは彼らが、終わりの時にキリストが万物のかしらとなるために進み出られる、万物の回復の日を体験できるようになるためです。

「満ちあふれる豊かさ」と「満たす」という用語、またそれと関連する用語が、この手紙には何度も出てきます：

- 神が私たちに**あふれさせて**くださった恵みの富（エペソ1:8）

私たちには与える神がおられます。この方は、その**大きな愛のゆえに**、ご自分のあふれる豊かさから与えてくださいます。

- ……教会はキリストのからだであり、すべてのものをすべてのもので**満たす方が満ちておられる**ところです（エペソ1:23）

ここで教会は、キリストを満ちた者とするという、息をのむような特権を持っています。キリストが誰かを必要とされるということでは決してありません。そうではなく、教会がキリストのからだであるということが問題なのです。神は栄光を受けた人イエスを取り、教会に贈り物としてお与えになりました。しかも教会のかしらとなるためにです。教会はまたキリストのからだとなり、それによってキリストは**人として**（子なる神としてではなく）完全な方とされます。5章の別のたとえが、これが何を意味するのかをよりはっきりさせてくれます。かつてのアダムとエバのように、夫と妻が一体となるのと同じように、キリストは教会と結ばれます。教会によってキリストは満ちた方とされ、私たちは永遠にこの結びつきの中にあります。キリストはまた常にこのような方としてご自身を現され、教会とのこの結びつきの中で、人間と御使いたちと神によって常に見られるのです。主はかしらとして、ご自分のからだと共に、すべてを満たされます。全宇宙が、主の遍在と祝福のこの刻印を帯びるのです。

- ……**神の満ちあふれる豊かさ**にまで、あなたがたが満たされますように（エペソ3:19）

これが私たちに対する神の目標であり祝福です。ただ神の内にあるのみ、私たちは満たされ、安息に至ります。私たちが願うのはただ、神の力に満たされること、キリストが私たちの心に住まわれること、そして私たちがキリストの愛を知ることです。神は私たちのもとに住まいを設け、私たちの生活を変え、ご自分の満ちあふれる豊かさを私たちを通してほかの人々に流れさせたい

と願っておられます。神ご自身の満ちあふれる豊かさのすべてに、私たちは地上では到達できませんが、それはすでに始まっています。

神の満ちあふれる豊かさは、いくつかの宗教で信じられているような非人格的なものではなく、イエスにおいて、また聖書を通してご自身を啓示された三位一体の神ご自身です。

- 降って来られた方ご自身が、**すべてのものを満たすために**、すべての天よりも高く上られた方なのです！（エペソ4:10）

主はすでに今、すべてを満たしておられます。目に見えない世界、天上は、キリストの勝利で満たされています。諸力がまだ悪事を働いているとしても、贖われた教会によって、キリストの勝利が彼らに示されています。彼らの日々は数えられており、神の御子によってすべての造られたものが満たされることを妨げるものは、やがて何もなくなります。

- ……成熟した大人となって、**キリストの満ち満ちた身丈にまで達する**（エペソ4:13）

神の満ちあふれる豊かさの中に目標を見いだすのは、個々の信者だけではありません。教会全体も同じように、この動的な成長の過程の中に置かれています。ここでも、目標はキリストご自身の満ちあふれる豊かさにほかなりません。キリストの満ちあふれる豊かさとは、主が教会を満たし、それに浸透し、それを整え、導き、祝福し、栄光の中で目標へと至らせることを意味します。

- ……御霊に**満たされなさい**！（エペソ5:18）

自分の身に何かが起こるのを受け入れなさいというこの勧めは、私たちが、神とその目標と競合するすべてのものを自分の生活から取り除くよう、私たちを促すべきものです。私たちが自分自身と自分の願いを空にするときにだけ、主は私たちを満たすことがおできになります。しかしそのとき、主は存分に力を発揮し、私たちがどんな奉仕に召されるとしても、そのための権威と能力を与えてくださいます。

この手紙はキリストの富で満ちています。その富は私たちを、神で、キリストで、そして御霊で満たします。こうして一方では、私たちの人生の実存的な渇きがいやされ（詩篇42:1-2、ヨハネ4:13-14、7:37-39）、こうして神は私たちに対するご自分の目標に到達されます。つまり、神に満たされた者としてのみ、私たちは神に倣う者となるのです。

旧約聖書の予型論とエペソ人への手紙：本当に可能か

旧約聖書は、この手紙の教えについて、説得力があり、わかりやすい予型を私たちに与えています。この教えの中で、信者たちはすでに天に移された者として描かれています。それは、イスラエルの民のカナン入国において予型的に前もって示されています。この約束の地は、斥候たちがすでに証言していたように、きわめて豊かでした。しかしそこには強力な敵もいました。これは、キリストの死と復活と昇天によって私たちが入った天上の所に相当します。強力な敵は、先に説明した悪しき支配と権威に相当します。ヨルダン川は死の象徴であり、その地に入るためには、

それを渡らなければなりません。ヨシュアは、神の御座に着かれた勝利者としての主イエスの予型です（エペソ1章）。

この予型によって、この状況が今の霊的な現実であることがはっきりします。天上の所は遠く離れてはいません。霊的な戦いも、天の祝福を享受することも、私たちの生活の中で、教会の中で、職場で、家庭で起こっているからです。ですから私たちは、天上の所についてのこの教えを、地理的に、ましてや宇宙論的に解釈する必要はなく、霊的に解釈すべきです。天は、まったく実際的に見れば遠く離れてはいません。それは、私の心に住み、働いておられるキリストご自身と同じくらい近いのです。だからこそパウロは手紙の中心部で、「信仰によって、私たちの心のうちにキリストを住まわせてくださいますように」と祈っているのです（エペソ3:17-19）。

最後に、予型論から見た私たちのキリスト者としての立場と生活の全体像：私たちはイエスの死（紅海）によって世（エジプト）から救い出され、荒野に連れて来られました。私たちが今いる世は、私たちにとって荒野となりました。そこは本当は私たちのいるべき所ではありません。イエスは、私たちは世のものではないと言っておられるからです。私たちは旅の途上にあり、目標である私たちの主の天の御国へと向かう信仰の道を歩んでいます。しかし同時に、キリストの死とその復活によって、私たちは主の内にあって天上の所、天の領域にいるということも真実なのです。

イスラエルにとっては一つのことしか当てはまりえませんでした。私たちにっては両方が、つまり荒野とカナンが同時に当てはまります。たとえば言えば、私たちは足を荒野の砂の中に置き、頭を、いやむしろ心を天に（私たちの宝のある所に）置いているのです。

かしらであるキリスト：一致、機能、代表

この手紙では、キリストがかしらであるということが、少なくとも二つの仕方で示されています。

1. すべての造られたものの上に立つかしらとして（エペソ1:10、22）、そして、からだ、すなわちご自分の教会のかしらとして（エペソ1:23）です。

かしら（頭。ギリシア語では人間の生物学的な「頭」にほかなりません）には、さまざまな側面があります：

1. 一致：頭とからだの一致。このたとえは、有機的で生きた一致を語っています。
2. 機能：人間という有機的な統一体の中で、頭とからだは一定の秩序の中に置かれており、それぞれの部分には定められた機能と役割があります。そこには序列の側面もあり、その中でかしらは最上位に立っています。
3. 代表：ある人について私たちの記憶に残るのは、たいていその顔です。頭は人間全体を表します（例えば、パスポートの写真）。国家の（最高の）かしらである連邦大統領は、世界の他の国々に対して国を代表する務めを担います。

キリストがかしらとして言及される所では、ほとんどいつでも、この三つの側面を見いだすことができます。

当時、このギリシア語（**kephale κεφαλή**）がどのように用いられていたかは興味深いことです。それは人間や動物の頭のほかに、際立っているもの、第一の、あるいは上位の位置にあるものを表しました（例えばエペソ5:23など）。同様に、この語は河口、泉、ある事柄の起源、あるいは時代の始まりを表すのにも用いられました。

旧約聖書では、父たちがその家族のかしらと呼ばれています（例えば民数記1:4）。

イスラエルは神によって、すべての国々のかしらとなるように、つまり諸国民の上に、あるいは諸国民の中にあって際立った地位を占めるように定められていました（申命記28:13）。ここで問題なのは、序列上の地位というよりも、神に関して諸国民の光となることです。新約聖書では「かしら」という概念がキリストに当てはめられています。キリストがかしらと呼ばれるとき、それは常に人としてです。かしらとして、キリストは常に人間との関係の中に立っておられるからです。キリストは、成し遂げられた贖いのみわざに基づいて、栄光を受け、王座に就かれた人としてかしらなのです。

- キリストは「礎の石（隅のかしら石）」、すなわち、すべてのものがそれに合わせて方向づけられ、また方向づけられなければならない隅の石です。キリストはすべてをつなぎ合わせておられます。家を建てる者たちがキリストという石を捨てた後、神はキリストをそのような方とされました。こうして神はキリストを、全世界のための唯一の救いの源とされたのです。天の下でこの御名のほかに、救いはありません（使徒4:11-12）。
- ローマ人への手紙5章12節以下でも、私たちはアダムと対比されるかしらとしてのキリストを見いだします。そこでは文字どおりにかしらについて語られているわけではありませんが、アダムがかしら、すなわち罪に堕ちた人類の始まりであり起源であることがわかります。キリストは、新しい、贖われた人類の始まりであり創始者です。
- キリストはからだ、すなわち教会のかしらです。聖霊によって、すべての信者はペンテコステに一つのからだへとバプテスマを受け（コリント第一12:13）、天におられる栄光のキリスト、からだのかしらと結ばれました。からだのかしらとして、キリストは地上の教会にとっての天の源であり、教会は地上でその機能を果たすために必要なすべてのものを、そこから受け取ります。かしらの役割は、からだを支配することではなく、与えること、養うこと、世話をすること、愛することです。これはまさに、結婚における夫と妻の模範でもあります。私の頭は私のからだを支配するのではなく、私のからだは脳に服従するよう強いられるものではありません。かしらとからだの本質は、有機体の一致であり、全体が自然に機能することです。脳の命令は、強制や服従なしに自然に実行されます。脳が制御しているので、頭（かしら）には特別な意味があります。それでも、パウロがかつて夫と妻について言っているように、からだなしのかしらも、かしらなしのからだも、何ものでもありません。教会はここ地上で、その天のかしらであるキリストを代表しています。そして同じように、教会は天においてキリストによって、神と御使いたちの前に代表されているのです。

来たるべき千年王国と新しい創造における、万物のかしらの三つの側面は、次のように表されます：

1. 一致： 被造世界の内部にも、もはや隔てや断絶はなく、被造世界と神との隔てありません。かしらがなければ、万物は死んだようなもので、神にとって役に立たず、価値のないものでした。キリストとの結びつきと一致の中で、頭がからだと結ばれているように結ばれて、すべてが回復され、神のもとへ連れ戻されます。

2. 機能： 頭とからだの一致は、存在のあらゆる隅々にまで完全な影響を及ぼすことを可能にするので、すべてが主イエスによって刻印されることになります。すべてが主の望まれるとおりに機能するようになります。

万物のかしらとして、主は河口のように、とどめることのできない広く深い祝福の流れを万物の中に流れ込ませます。すべてが主イエス・キリストの偉大さと祝福の満ちあふれる豊かさの中に浸されるのです。

3. 代表： 万物は主によって、完全な調和のうちに神のもとへ連れて来られます。そのとき神は完全に、永遠に栄光をお受けになります。そのとき万物は、神の限りない喜びを受けておられるキリストによって、神の喜びを受けるようになります。神がご自分のキリストを見られるように、そのとき神は万物をご覧になるのです。かつてなかったこの状態には終わりがありません。古いものは過ぎ去り、見よ、すべてが新しくなったのです。

五つの賜物：使徒、預言者、伝道者、牧師、教師 — 今日も？

エペソ人への手紙の重点の一つは、キリストのからだとしての教会です。2000年の教会史を経た今日でも、このからだがその実際の姿において（残念ながら、一つのからだとしての一致はもはや目に見えなくなっていますが）なお存在しているという事実は、栄光を受けたキリストがご自分のからだに賜物を与えてくださったことに理由があります。これらの賜物は、キリストが栄光を受けた教会のかしらであることを証明しています。

興味深いことに、ここでは二つの「種類」の賜物が問題になっています。1. 誰もが賜物を持っており、それは計り知れないほど重要なことです（エペソ4:7）。そして2. 人物として、キリストから教会への賜物である信者たちがいます。これらの賜物は、周囲のすべての人にとって見て取ることのできる、使徒、預言者、伝道者、牧師、教師としての能力を持った人々です。

この関連で、当然ながら、このテーマに関するほかの二つの主要な聖書箇所、すなわちコリント人への手紙第一12章とローマ人への手紙12章も参照し、比較しなければなりません。そこには、ここで挙げられているよりも多くの恵みの賜物が見いだされます。しかし、ここに挙げられているものは、最も重要な、あるいはおそらく最も大きな賜物であるように思われます。特に、ここではそれらが人物そのものと直接同一視されているのですから、なおさらです。

これらの賜物が何を意味し、その能力がどこにあるのかは、容易に想像できます。しかし、これらの賜物が、つまり五つすべてが、今日もなおキリストによって教会に与えられているのかという問いが生じます。

一般には、最初の二つの賜物はもはや与えられていないとされています。使徒は12人プラス1人という決まった数でした。預言者ももはや存在しません。聖書の正典は完結しており、ほとんど

すべてのキリスト者がそれを手にすることができるからです。使徒たちの働き、あるいは教会への彼らの賜物は、そうであれば、今日に至るまで彼らの書いたもの、すなわち新約聖書の中に存在していることになります。

別の見方では、五つの賜物すべてが今日もなお与えられていると信じられています。原則として、この言明は時代を超えて、常に有効なものとしても読めます。教会は今日に至るまで、これら五つの（人物の）賜物と、各肢体が持っている恵みの賜物の助けによって機能しているのです。

バルナバが一度パウロと並んで使徒と呼ばれていること（使徒14:14）、パウロが、自分と一緒にテサロニケにいた複数の使徒について語っていること（テサロニケ第一2:6）、そしてアンドロニコとユニアスがおそらく使徒たちの中に数えられていること（ローマ16:7）は、使徒が12人プラス1人だけではなかったという結論を許します。

この見方では、今日の使徒は当然ながら、例えば新使徒教会で行われているような、使徒の系譜を継承する者ではありません。また、今日の使徒は肉眼でイエスを見たわけでもありません。小羊の十二使徒は、永遠の都の土台の中に、永遠に特別な地位、あるいは記念を持つこととなります。使徒は今日、1世紀のような意味をもはや持ってはいませんが、その務めはやはり似た特徴を持っています。

私は、今日の使徒に数えられるのは、リバイバルの始まりに立つ人々、教会を開拓する人々、キリスト教界の指導者たちであると考えています。確かに彼らは使徒的な権威を持ってはいませんが、からだの成長ということになると、きわめて重要な役割を担っています。これについて一つ引用します（トーマス・イエッテル [Thomas Jettel]）：「この語（*apostolos* ἀπόστολος、使者、遣わされた者）は、新約聖書ではさまざまな意味で用いられている。イエスは十二人をご自分の最初の使者として任命された。パウロもまた、主ご自身から直接、特別な使者として任命された（ガラテヤ1章、コリント第二12:12）。ヤコブも特別な地位を占めていたようである（コリント第一15:7、ガラテヤ1:19）。これらの人々は土台を据えた使徒たち（エペソ2:20、3:5）であり、いわば第一級の、最高位の使徒たちであった。彼らはそのメッセージを主から直接受けた。しかし新約聖書は、使徒という概念を彼らに限定してはいない。ほかの人々、例えばバルナバ（使徒14:4。ガラテヤ2:8-9参照）、シラスとテモテ（使徒17:1、4、テサロニケ第一1:1-2。2:6-7参照）、テトス（テトス1:5、3:12）も、より広い意味で『使徒』と呼ばれている。彼らは同じ質と権威を持ってはいなかったが、土台を据えた使徒たちと似た働きをした。彼らは伝道者であり教師であり、新しい群れに道を示し、教師として各地を巡った。彼らの働きは指導的なものであったが、一つの地域に限られたものではなかった。この人々の群れを『宣教的教師』と呼ぶこともできる。」

同じことが預言者にも当てはまります。この賜物について私たちはほとんど知りません。わかっているのは、関連する三つの（賜物の）聖書箇所（エペソ4章、コリント第一12章、ローマ12章）がすべてそれを含んでいるということだけです。新約の預言者は、そのほかには次の箇所では言及されていません：

使徒13:1：さて、アンティオキアには、そこの集会に、**預言者**たちと教師たちがいた。バルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、クレネ人ルキオ、領主ヘロデと一緒に育てられたマナエン、そし

てサウロである。

使徒15:32：ユダとシラスも自ら**預言者**であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。

1世紀の預言者とは、まだ新約聖書が存在しなかった間に、真理を啓示する、つまり伝えることのできた人々のことでもありました。使徒ではなかったけれども、例えばヤコブやユダのように、その手紙が新約聖書に収められた人々も、そのように呼ぶことができます。新約聖書正典の完結後、今日ではこの務めはもはや必要ありません。ですから、靈感による聖書の執筆というこの務めも、もはや存在しないのです。

今日の預言者とは — この点で彼らは旧約の預言者に似ています — 時代の精神を見抜いて暴くことのできる人々、キリスト教界の危険な傾向を暴き、糾弾する人々です。そのような人々は、痛いところを指摘するので、それゆえに煙たがられもします。彼らの務めは勧告です。彼らは将来の出来事を予告することもなく、新しい真理を啓示することもあります。それは新約の預言者の務めではなかったし、今もそうではありません。したがって私たちの時代の預言者の務めでもないのです。

新しい人：どこで、どのように見えるものとなるのか

宗教も、教育も、政治も、遺伝学も、新しい人を生み出したことはありません。何度もそれが試みられてきたとしてもです。人間について、人間が昔からそうであったもの、また今日も人間を形づくり、人間が引き起こしていることについて、客観的に考えようとする人は、必然的に新しい人の必要性に行き着くでしょう。

創造主なる神は、罪に堕ちた人、罪の中に生きている人を「修理」したり「改造」したりはされませんでした。律法もそれを成し遂げることはできず、ただ人間が矯正不能であることを確認しただけでした。古い人はもはや改善することができません。ゴルゴタの十字架は古い人の終わりです。キリストは私たちの代わりに、古い人へのさばきと死をご自分の身に負われます。キリストの復活において、新しい人が現れます — 私たちは神の傑作、新しい創造です — この新しい人は、神ご自身にかなうように造られています（エペソ4:20-24、ローマ6:1-11、ガラテヤ5:16-26）。それはまず、そして私たちが地上に生きている間は、私たちの心、内なる人に関わるものであって、まだその人のからだには関わりません。それは人の考え方、生き方の姿勢、意志、そして感情にも関わります。しかし新しいものは、その実際的な影響において、すぐに完全にそこにあるわけではありません。まるで私たちが一挙に完全な者とされたかのようにではないのです。新しいものは種のように私たちの内に置かれ、成長すべきものです。私たちを新しく生まれさせた御霊と生けるみことばの力が、イエスのかたちへと絶えず継続的に変えていくのです。エペソの人々に対して、パウロは「あなたがたが心の霊において新しくされ」ることについて語っています。この変化の過程には**二つの側面**があります。一方では、それは神のみわざと力であり、この新しくされる過程を体験するために、私たちはそれに信頼しなければなりません。しかし他方で、私たちは全面的に責任を負わされ、この新しい人にふさわしく行い、振る舞い、決断するよう求められています。別の言葉で言えば、私たちはまるで自分次第であるかのように努力し、そしてそ

の中で、その働きなしには何も成功しえない神に信頼するのです。この意味で、まことのぶどうの木であるイエスは、神のための実が問題になっているとき、「わたしを離れては、あるいはわたしの外では、あなたがたは何もすることができません」と言っておられます。

ですから新しい人とは、新生の時から私の新しい人格なのですが、それは古い環境の中にあります。変わったのは私の周囲ではありません。私が変わえられたのであり、霊的な成長の過程の中で絶えず変えられ続けているのです。

こうしてパウロは、私たちのよく知っている生活上、社会上の関係の中に現れる新しい生活を、次のように描いています：

4章1-16節：教会において、キリストのからだにおいて

ここで新しい生活は、自分を控え、教会生活の中で自分を押し通したり、ほかの人々を無視したりしないように心がけます。その振る舞いは、教会の実際的な一致を保つことに役立つべきものです。同じように、各肢体は教会の霊的な成長を促す責任の中に共に引き入れられています。誰もがキリストから賜物を受けているからです。

4章17-24節：世との根本的な違い

神から遠く離れた世における生活と、神から出た生活、天の父との息子としての交わりの中にある生活ほど大きな対照は、おそらくありえないでしょう。この二つの生き方の意味の豊かさと永続性は、昼と夜ほどに異なっています。

4章25-32節：新しい生活のための戒め：話すこと、働くこと、赦すこと

パウロは、新しい生活が日常生活の中でどのように道を切り開いていくのか、さまざまな具体的な事柄を示し始めます。怒りや怒号、激しい憤り、苦々しさは、本当の意味も愛もない古い生活にしか属しえません。盗みは過去のものとなるべきであり、私たちの話すことばは積極的で、人の徳を高めるものです。それは人を引き下ろすのではなく、引き上げるのです。

5章1-14節：神に倣う者：冗談、性、光と闇

神のない世にあって、私たちはまさに神に倣う者であるべきです。下品な冗談や、ゆがんだ、曲がった時代の汚れや不潔を喜ぶようなことは、もはや私たちからは聞かれません。性は、尊いものであると同時に非常に壊れやすい神からの贈り物です。世とはもはや、自ら進んで心の交わりを持つことはありません。むしろ私たちは世の光として、光へ、昼へと至る道しるべなのです。

5章15-21節：機会を十分に生かすこと、アルコール、教会での礼拝

神は、私たちを通してご自身を現すために特別な瞬間を与えてくださいます。それは、神が備えてくださった行いであり、私たちがその中で行動するためのものです。神の子ども、光の子どもは、無計画に、受け身で生きることはしません。彼らは与えられた時間を生かし、新しくされた分別と理解力をもって、よく考えて行動します。彼らは神のみこころを行います。彼らは、人を怠

情にし、しらふでいられなくし、主に近づけることのないアルコールに酔いつぶれることはありません。

酩酊させるものではなく、御霊が私たちをすっかり満たし、満ちあふれさせるべきです。そうすれば私たちは、教会の中でほかの人々の役にも立つことができます。そうすれば満たされた心から、心からの真の賛美と感謝が可能になります。それは私たち自身の徳を高めるだけでなく、それを聞くすべての人の徳を高めるのです。

5章22-33節：夫と妻の結婚 — キリストと教会

結婚は生涯にわたる課題であり、ひとりでに、あるいは自動的にうまくいくものではありません。当時、妻は所有物であり、絶対的な服従が課せられていました。夫に対して妻を愛せよという戒めは、古代には存在しませんでした。しかし福音の光は、妻たちをこの状況から導き出します。夫は妻を愛すべきです。しかも、それを超えることのできない基準に従ってです。すなわち、キリストが教会を愛されたように、です。

妻たちのほうも、今や福音の光と自由の中で、夫に反抗してよいと考えるべきではありませんでした。彼女たちもまた、キリストと教会の模範を自分に当てはめるべきでした。からだである教会がかしら（キリスト）に従うように、妻たちも夫に従うのです。夫と妻に関わる、キリストに倣うすべての行いは、新しくされた心の確信から、自発的に、強制されることなく行われます。

6章1-4節：子どもと父親

子どもたちは、信仰を持っていなくても、両親に従うべきです。それは彼らにとって祝福となります。イスラエルに与えられた十の戒めの第六の戒めが当てはまります。それは時代を超えて常に有効であり、両親と子どもたちのいのちと祝福のための戒めです。

父親たち、あるいは両親は、子どもたちに愛をもって、しかしけじめをもって接するべきです。それは、子どもたちが勇気を持って成長し、主を受け入れて主に従い、そしてごく当然に大人となって、いつの日か自立して生活し、今度は自分たちで家庭を築くことができるようになるためです。

6章5-9節：労働関係：主人と奴隷、信者と未信者

今日では奴隷制はそのような形ではもはや存在せず、福音の影響のおかげで廃止されていますが、私たちはこれらの勧めから、今日の労働関係にも適用できる原則を汲み取ります。

最も重要な原則は、同時にとても単純なものでもあります。すべてのキリスト者は、まず自分の天の主人に対して責任を負っているということです。私たちが喜ばせたいのは人間ではなく、私たちの永遠の主です。しかし主を喜ばせることは、ほとんどの場合、地上の主人に従うことを意味するでしょう。上司に対する絶え間ない批判や心の中の恨みは、キリスト者の特徴ではありません。これは複雑なテーマですが、キリスト者は、ここでもどのようにして主と福音の証しとなることができるかを考えます。

6章10-20節：あらゆる戦線での霊的な戦い

最後に、実際の信仰生活についてこれまで語られたすべてのことへの訴えであり要約として、パウロは、霊的で目に見えない戦線が、生活のあらゆる領域、あらゆる状況を貫いていることを指摘します。多くのキリスト者は、目に見えない世界からの危険に気づかず、まるで悪魔が存在しないかのように生きています。パウロはいわば、この手紙の中で生活のあらゆる状況を取り上げることはとてもできない、と言っているのです。しかしその代わりに彼は、生活のあらゆる状況と危険の中で、私たちが主にあって立ち続けることができる神の武具を示しています。

支配と権威：悪い者と、目に見えない天の世界

目に見えない世界の人格的な霊的諸力を表す用語がこれほど頻繁に出てくる手紙は、新約聖書のほかにはありません。ほかの手紙も、パウロの手紙も含めて、それについて語っていますが（例えばローマ8:38、コロサイ1:16、2:15、ペテロ第一3:22）、これほどの頻度ではありません。これはこの手紙の特徴です。

パウロ自身に語らせ、これらの存在に言及しているすべての聖句を引用しましょう：

- ……そして神はこの方（キリスト）をご自分の右に、天上の所に座らせ、**すべての支配**（*π ά σ η ς ά ρ χ η ς* *pases arches*）、**権威**（*ἐ ξ ο υ σ ί α ς* *exousias*）、**力**（*δ υ ν ά μ ε ω ς* *dunameos*）、**主権**（*κ υ ρ ι ό τ η τ ο ς* *kurietet0s*）の上に、また今の世だけでなく、次に来る世においても名づけられるすべての**名**（*onoma*）の上に置き、すべてのものをこの方の足の下に従わせ……（エペソ1:21-22）

考えうるあらゆる霊的人格の上に、キリストは人として高く上げられています。これらの存在は神の創造の中で高い地位を占めていますが、キリストの地位はそれらよりもはるかに高いのです。それはいと高き方の御座に、神の右にあるからです。

- ……**空中の権威を持つ支配者、すなわち霊**に従って。この霊は今も不従順の子らの中に働いている……（エペソ2:2）

諸力は世界の出来事に具体的に、強力に影響を及ぼしています。彼らは政府の中枢だけでなく、普通の人々にも、つまり霊的に死んでいて、それゆえ諸力の手に委ねられているすべての人に影響を及ぼしています。ここで彼らは、はっきりと神に敵対するもの、すなわち悪魔的なものとしての正体を現しています。これらの存在の中に支配者がいるとすれば、それは悪魔以外にはありえません。そして聖書もそう言っています。マタイ25:41。

- ……それは今、天上にある**支配と権威**に、教会を通して神の豊かな知恵が知らされるためであり……（エペソ3:10）

目に見えない世界全体に対して、神の救いのみわざとその結果である教会が、神の知恵の宣言として示されます。諸力は驚嘆し、歯ざしりしながら引き下がるほかありません。勝利は私たちのキリストのものであり、教会はキリストの「戦利品」です。諸力は敗れたのです。

- 天と地にあるすべての**家族**の名の由来である方……（エペソ3:15）

一見したところ、ここではこれらの諸力について語られていないとしても、ここでは、彼らもまた被造物であり、創造主から名前を与えられていることが明らかにされています。これはエペソの人々に、これらの諸力が自律的な存在でも（全）能の神々でもなく、創造主に服従していることをはっきりと示します。この関連で興味深いのは、魔術においては、霊をその名前で呼んだり、呼び出したりすることが重要であったということです。

- 「高い所に上られたとき、主は**捕虜**を捕らえて引き連れ……（エペソ4:8）」

ここでも、関連は直接には明らかではありません。しかし捕らわれの状態は、キリストが十字架と復活によって打ち砕かれた闇の力によるものでした。ここでイエスの昇天は、成し遂げられ、勝利を収めた贖いのみわざの後の凱旋行進なのです。

- ……**悪魔**（**δ ι ά β ο λ ο ς diabolos**）の**策略**（**μ ε θ ο δ ε ί α ς methodeia**）に対して堅く立つことができるように。私たちの格闘は血肉に対するものではなく、**支配**（**ἀ ρ χ α ι archai**）、**権威**（**ἐ ξ ο υ σ ί α ς**）、この**暗闇**（**σ κ ό τ ο ς skotos**）の**世の支配者たち**（**κ ο σ μ ο κ ρ ά τ ω ρ kosmokrator**）、また天上にいる**悪の霊的諸力**（**π ρ ο ` ς τὰ π ν ε υ μ α τ ι κὰ τῆς π ο ν η ρ ί α ς pneumatika tes ponerias**）に対するものです。（エペソ6:11-12）

ここで初めて、諸力と結びつけて悪魔の名が挙げられています。悪魔はこれらの諸力の頭、その「将軍」です（マタイ12:22以下参照）。こうして諸力の仮面がはがされます。彼らが常に敵であり、私たちの内における、また全世界における神のみわざを妨げ、損なうためにあらゆることをしているということが明らかになります。

このテーマがこの手紙の中心的なテーマの一つであるのはなぜでしょうか。エペソの人々は、今日の私たちのように「啓蒙された」、近代的な、あるいはポストモダンの時代に生きていたものではありませんでした。彼らの生活、この時代の、この町の、小アジアの、ローマ帝国の社会は、偶像崇拜によって刻印されていました。エペソは、人々がそこからキリストへの信仰に導かれてきた社会のあらゆる層に至るまで、宗教に浸り切っていました。生活は、ローマ人からはディアナと呼ばれたアルテミスへの奉仕によって決定されていました（図を参照）。さらにエペソは、魔術とオカルト的な行為の中心地でした。B・M・メッツガー（B.M. Metzger）はこう言っています。

「すべてのギリシア・ローマの町々の中で、エペソは帝国で三番目に大きな町であり、あらゆる種類の魔術師、呪術師、いかさま師にとって、群を抜いて魅力的な場所であった」。ルカは（後述）、呪文やオカルト的な内容を記したそのような魔術の書物が大量に、福音を信じた人々によって焼かれたことを報告しています。ユダヤ人たちにも独自の魔術があり、この霊的な暗闇にあずかっていました。ユダヤ教、ヘレニズム、ローマの祭儀の混合は日常茶飯事でした（シンクレティズム、混合宗教）。それに加えて占星術、すなわち星によって定められる運命への信仰がありました。それらは生活を決定し、脅威的で、現実的で、要求するものでした。誰も本当にそこから自由ではありませんでした。この偶像礼拝は、パウロが言及している諸力が、エペソの人々に、そして人々全体に直接の影響を及ぼすための橋頭堡であり、手段でした。これらの諸力は、名前で呼びかけられ、呪文を唱えられることによって、とりわけほかの人々に対して、自分の目的や利益

を達成するようなことを行うよう命じられました。これらの諸力は恐れを引き起こしました。その「遍在」のゆえに、人々は安心していませんでした。

そこで問いはこうなりました。福音を信じた人々については、今どうなのか。諸力はまだ影響力を持っているのか。キリストは諸力と同じ段階にあるのか、彼らにまさっているのか、それとも劣っているのか。彼らはなおも諸力の手に委ねられているのか。諸力に対してどのように振る舞うべきなのか。それとも、これらの祭儀を新しい信仰と一緒に保持すべきなのか。

この時代は、とりわけハイチやアフリカのブドゥー教と比べることができます。そこでは人々が神々を恐れて暮らしています。しかし彼らが福音を信じると、この束縛と恐れは打ち破られます。神々の影響は、これらの祭儀の中で、またそれらを通して、西洋世界で起こっているのとは違った仕方で現れます。しかし西洋世界でも、それほどあからさまではないにせよ、同じように現実なのです。ハイチやアフリカ、そして地上のほかの多くの地域でも、人々は神々を信じています。神々は日常生活の一部です。私たちのところでは、人々はこれらの存在を信じていません。しかしまさにそのこと自体が、人々を束縛の中にとどめておくために悪魔が手にしている有利な点なのです。

この束縛と闇の力は、私たちの地域では、大部分は悪霊につかれることとは関係ありません。私たちの社会においては、それは世と、人間の欲望や情欲と、目に見えない諸力との共同作用です（エペソ2:2）。世の体制は悪魔によって操られており、それによってすでに、人間が神から引き離される環境が作り出されています。それに加えて、人間自身が罪を望み、自分が服従しなければならない神を望まないということがあります。この二つの前提条件が、空中で、すなわち私たちのすぐ身近な環境の中で働いている目に見えない悪の諸力に、それらすべてを自分たちに有利なように強めるあらゆる可能性を開いています。その際、彼らはあらゆる点で人間に害を与えるために、重要な要所（政府、学校、教育、技術、余暇）に、また自然にも力を集中させています。しかしそれは、最終的には神が許される枠の中で起こっていることです。目に見えない世界における神への反逆の規模は、私たちが目に見える世界で経験しているものに匹敵すると思えなければなりません。

この暗闇の世の支配者たちの主要な攻撃目標は、当然ながら、彼らの力から奪い取られ、彼らがもはや御父と御子の手から奪い取ることをできない人々です。信者たちはそこで安全なので、彼らは信者たちの信仰生活を、そして何よりも福音への熱意を破壊しようとします。これこそ彼らが恐れなければならないものです。福音は人々を彼らの力から解放することができるからです。神の恵みの福音は、彼らの日々が数えられていることの証明なのです。

パウロがこれらの御使いの存在を表すさまざまな用語を挙げるとき、彼は人々や祭儀そのものが、それもユダヤ人と異邦人が用いていた用語を使っています。これらの存在に関して、彼は当時の世界観を受け入れています。それはある意味で現実と合致していたからです。パウロがしていないこと — 私たちはひょっとするとそれを望んだかもしれませんが — は、御使いの世界の序列を展開すること、あるいは悪魔的な策略を生み出す悪魔の企業の組織図を示すことです。用語からは序列があることが推測されます。異邦人は御使いの世界にそのような序列を知っていました。パウロは本当に重要なことだけを語り、力ある、それゆえ人間にまさる被造物の人格的な現実

を、ただ前提としています。彼にとって重要なのは、これらの諸力がキリストに服従させられていること、そして信者たちが彼らの独裁から解放されていることを宣べ伝えることです。しかし同じように彼にとって重要なのは、諸力は打ち負かされているにもかかわらず、できるかぎりどこでも信者を攻撃するということです。それによってキリスト者は、悪霊的な（世的な、罪深い）影響に対して最高度の警戒をするよう呼びかけられています。キリスト者はこれらの策略を見破り、それに抵抗すべきです。それによって、キリスト者であることは戦いとなります。しかしその戦いは、勝利者であり高く上げられた主イエス・キリストの力によって勝ち取ることができるのです。エペソ人への手紙は、その受取人たちが、主とその大能の力に拠り頼みながら、諸力に対するキリストにある新しい立場を意識して生き抜くことができるようにしています。この感覚を、私たちはおそらくかすかにしか追体験できないでしょう。しかしそれだけにいっそう、私たちはこれらの影響を私たちの時代においても真剣に受け止めるべきです。

聖書自体が、御使いが国々に対して力を持っていることを報告しています。ダニエル書10章では、君たち、すなわちメディアとペルシアの王国の、またギリシアの御使いたる力について語られています。アレクサンドロス大王のカリスマ的な人格とその急速な台頭は、この観点からのほうがはるかによく理解できます。御使いの長ミカエルはイスラエルの民に割り当てられています。申命記29:26、32:8（七十人訳と古ラテン語訳は「神の御使いの数に従って」と読む）では、これがすべての民に広げられています。

諸国民の神々はむなしきもので、何ものでもなく、本当の神々ではありません。ヤハウェのほかには神はいません。しかし他方で、これらの偶像の背後には悪霊の世界が隠れています（コリント第一10:19以下）。このようにして、目に見える世界が目に見えない世界に直接影響を与えることがあったのです。

使徒の働き（19章）におけるルカの詳しい報告は、上で述べたことを裏づけています：

「彼（パウロ）は会堂に入って行き、三か月の間、大胆に語り、論じ合い、神の国のことについて彼らを説得した。しかし、ある者たちがかたくなになって信じようとせず¹、群衆の前でこの道²を悪く言ったので、彼は彼らから離れ、弟子たちを分けて、毎日ティラノの講堂で論じ合った。これが二年間続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も、主のことは聞いた。また神はパウロの手によって並外れた力あるわざを行われたので、人々は彼のからだから汗ふきや前掛けを取って病人に当てることさえした。すると病気は彼らから去り、悪霊は出て行った。

ところが、巡回していたユダヤ人の魔よけ祈禱師たちの中にも、悪霊につかれている人々に向かって主イエスの名を唱えようとする者たちがいて、こう言った。『パウロが宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる！』 これをしていたのは、ユダヤ人の祭司長スケワという者の七人の息子たちであった。すると悪霊は彼らに答えて言った。『イエスのことは知っているし、パウロのこともよく知っている。だが、おまえたちは何者だ。』そして悪霊の入っている人は彼らに飛びかかり、二人を押さえつけて打ち負かしたので、彼らは裸にされ、傷を負って、その家から逃げ出した。このことは、エペソに住むユダヤ人にもギリシア人にも、すべての人に知れ渡った。そして皆が恐れに打たれ、主イエスの名があがめられた。信仰に入った人々の多くがやって来て、

自分たちの行っていたことを告白し、明らかにした。また魔術を行っていた者たちの多くが、その書物を持って来て、皆の前で焼き捨てた。その値段を合計すると、銀貨五万枚になった。こうして主のことばは力強く広まり³、勢いを増していった⁴。」（ドイツ語のエルバーフェルト訳聖書から訳出）



偉大なのはエペソ人のアルテミスだ！使徒19:23-40

「そのころ、この道⁵のことで、少なからぬ騒動が起こった。デメテリオという名の銀細工人が、アルテミスの銀の神殿模型を造って、職人たちに少なからぬ収入を得させていた。彼はこの職人

たちと、同じ仕事に携わる労働者たちを集めて、こう言った。『皆さん、ご存じのとおり、私たちの繁栄はこの仕事のおかげです。ところが、見たり聞いたりしているとおり、あのパウロは、エペソだけでなく、ほとんどアジア全体にわたって、手で造ったものは神ではないと言って、大勢の人々を説き伏せ、心変わりさせてしまいました。これでは、この商売の評判が落ちる危険があるだけでなく、大女神アルテミスの神殿も軽んじられ、全アジアと全世界が拜んでいるこの女神の威光さえも失われてしまう危険があります。』

これを聞くと、人々は激しい怒りに満たされ、『偉大なのはエペソ人のアルテミスだ！』と叫び続けた。そして町中が混乱に陥った。人々は一斉に劇場になだれ込み、パウロの旅の同行者であるマケドニア人ガイオとアリストアルコを引っ張って行った。パウロは群衆の中に入って行こうとしたが、弟子たちがそうさせなかった。また、アジア州の高官⁶の何人かも、パウロの友人であったので、彼のもとに人を送り、劇場に出向かないようにと頼んだ。ある者はこれを、ほかの者はあれを叫んでいた。集会は混乱しており、大多数の者は何のために集まったのかさえ知らなかったのである。ユダヤ人たちが前に押し出したアレクサンドロという人を、群衆の中から引き出した。アレクサンドロは手で合図をして、民衆の前で弁明しようとした。しかし彼がユダヤ人だとわかると、皆の口から一つの声が上がり、およそ二時間にわたって『偉大なのはエペソ人のアルテミスだ！』と叫び続けた。しかし町の書記官が群衆を静めて言った。『エペソの皆さん、エペソ人の町が、大女神アルテミスと、天⁷から下った御神体との神殿守護者であることを知らない人が、いったい誰かいるのでしょうか。これは否定できないことなものですから、皆さんは静かにして、何事も軽率に行うべきではありません。皆さんがここに連れて来たこの人たちは、神殿を荒らした者でも、私たちの女神を冒瀆した者でもありません。ですから、もしデメテリオと仲間の職人たちが誰かに対して訴え事があるのなら、裁判の日が開かれていますし、総督たちもいます。互いに訴え出ればよいのです。もし何かほかの事について要求があるのなら、正規の集会で解決されるでしょう。実際、私たちは今日の騒動について、罪に問われる危険さえあります。この騒ぎについて弁明できるような理由が何もないからです。』こう言って、彼はその集会を解散させた。」（ドイツ語のエルバーフェルト訳聖書から訳出）

神の武具：霊的戦い、しかしどのように

霊的な戦いについての指示は、手紙の実践的部分の余韻というよりも、むしろその頂点として理解すべきものです。いずれにせよ、私たちの前にあるのは一種の締めくくりの総括的な演説です。それは、戦いが始まる前に将軍が兵士たちに語る演説にたとえることができます。霊的な戦いの緊迫性を正しく評価するためには、戦いを前にしたこの劇的な状況と緊張を少し思い描いてみるのがよいでしょう。

キリスト者の生活は絶え間ない戦いです。これを説明するために、パウロは兵士のたとえを用いています。おそらくローマの兵士でしょう。当時、彼らはエペソの街の見慣れた光景の一部でした。このたとえによって、パウロは戦争の差し迫った現実性と、その残酷な現実を強調しています。それは霊的な戦いにも当てはまります。実際には、パウロはここで闘技場での格闘（レスリ

ング)を表す語を用いています。それによって敵がすぐ近くにいることを強調しようとしているのです。この意味で、天上の所を天の闘技場にたとえることもできるでしょう。

予型論の箇所、私たちはすでに戦いについて語りました。それは当時、カナンで実際に、文字どおりに行われた戦いでした。パウロは、私たちの格闘は血肉に対するもの、つまり人間に対するものではなく、天上にいる悪の霊的な(目に見えない)諸力に対するものだと言っています(エペソ6:10-20)。たとえにとどまれば、これらの悪の諸力は、私たちがカナンに住むこと、すなわち天上におけるキリストにある私たちのキリスト者としての立場を生き抜くことを、全力で妨げようとしています。彼らがねらっているのは、私たちが天の祝福の富を味わわず、楽しまず、それを生き抜くことも証しすることもしないようにすることです。これらの諸力は私たちの信仰生活を破壊し、干上らせ、私たちがそこから出て来たこの世の流れへと押し戻そうとしています。この世の流れに順応することによって、キリストにある神の新しい人の証しも、福音の証しも死んでしまいます。そこに至る道は、悪霊につかれるのではなく、罪なのです。

思い起こしましょう。キリストにあって、エペソの人々は、これらの強大で数多くの御使的諸力の上に、ただ一度で永遠に高く上げられていました。ですから彼らはもはやそれらを恐れる必要はありませんでした。それは、今日の私たちにはほとんど理解できないほどの安堵であり解放でした。しかしここで彼らは致命的な過ちを犯す可能性がありました。脅威はまだそこにありましたが、もはや回心前と同じ仕方ではありませんでした。これらの霊的諸力は今もなお恐れるべきものでした。信者たちが再び攻撃目標となったからです。しかし今や問題は、キリストにある彼らの高い勝利の立場が実現するのを妨げることでした。この立場を彼らはもはや信者たちから奪うことはできませんでしたが、この立場の中で、あるいはこの立場の力によって生きる生活を奪うことはできたのです。今や恐れるべきは悪魔の暴力ではなく、悪魔の策略でした。これらの策略は、この世で、あらゆる場所で、生活のあらゆる状況の中で、結婚と家庭の中で、職場で、教会の中で、彼らに襲いかかりました。ですから信仰生活においては、最高度の注意と集中が求められています。それらは現実の存在、現実の力であり、空中で、つまり私たちのすぐ身近な環境の中で動き回り、絶えず私たちの転落と敗北を画策しているのです。しかしパウロは、私たちを強さの立場にあると見ています。それは私たちの立場に関してだけでなく、私たちの信仰生活においてもです。主の内にあって私たちは強く、打ち負かされたこれらの諸力よりも強いのです。キリストの力の外では、私たちに勝ち目はありません。これらの存在、これらの諸力は、私たちよりも強く、ずる賢いからです。

これらの諸力がどのように働くのか、その戦略と戦術が何なのかは、私たちが身に着けるべき霊的な武具から明らかになります。そこでは私たちの武器は、**真理、正義、平和、信仰、救い、そしてみことば**です。そこから、敵が偽り、不義、不和、不信仰、疑いによって私たちの信仰生活を破壊しようとしていることがわかります。**実に、敵が照準を合わせているのは、私たちのキリスト者としてのあり方の道徳的な力なのです。**

これらの目に見えない悪魔的な天の軍勢の悪い影響は、一部の人々が考えているように、必ずしも悪霊につかれることに現れるわけではありません。この影響は狡猾で、誘惑的です。私たちが相手にしているのは、敬虔を装ってやって来る光の御使いなのです。問題は何か華々しいことでは

ありません。つまり、私たちが攻撃を仕掛け、例えばある町や地域から悪の諸力を追い出すために、彼らに立ち向かうという意味のことではありません。カリスマ運動で行われているこの種の戦い方は、パウロのこの聖句から（そしてほかのどの聖句からも）決して導き出すことはできません。たとえ、エペソの町のオカルト、呪術、魔術のゆえに、私たちがひょっとするとそれを予想するとしてもです。いいえ、**この戦いは十字軍ではありません。不信者に対するものでも、悪霊に対するものでもありません。**これは、結婚や家庭や教会の中の不和によって、私たちの霊的生活をその最も弱い所で打とうとする戦いなのです。主の内において私たちはすでに今、これらの諸力に対する勝利の立場を占めています。ですから私たちは、まさにそのような者であり、そのように生きるべきなのです。

悪霊や悪霊につかれた人々との出会いがありうること、また実際にあることにも触れておかなければなりません。それは特に、呪術が文化の確固とした深い構成要素となっていて、そのため悪霊につかれることが多く起こる国々に当てはまります。しかし本当の信者、キリストにあって諸力の上に高く上げられている人々は、悪霊につかれることはありえません。悪霊の影響は信者の生活の中にも及ぶことがあります、それはオカルト的な重荷によるというよりも、世的な生き方によるものです。この事実が目に見えない世界と関連していることは、今日過小評価されています！

あらゆる罪や世への順応をこれらの諸力と結びつけることはできません。「どの茂みの陰にも悪霊が潜んでいるわけではない」のです。私たちを倒そうとしているのは、この世と、私たちの肉と、霊的な世界です。それは内からの影響、外からの影響、そして目に見えない世界による超自然的な影響です。

私たちの戦いはどのような特徴を持ち、どのような種類のものなのでしょうか。パウロの指示から読み取らなければならないのは、それが攻撃のための戦いではないということです。問題は「立ち向かう」こと、「抵抗する」こと、そして「立つ」ことです。ですから私たちは自分の陣地を守り、私たちの信仰の財産と信仰の経験を放棄したり、明け渡したりしてはなりません。唯一の攻撃用の武器は剣ですが、それも接近戦での防御に欠かせないものです。

それでも、この描写には攻撃的な要素があります。福音の宣言は、闇の国への正面攻撃です。福音は、悪魔からその獲物を奪い取ることでできる武器です。平和の福音の備えという良い履物は、福音宣教の戦いにおける機動性と前進を物語っています。

本文には述べられていませんが、励みになるのは、すべての戦いを一人で戦うのではないということです。私たちの隊形は主の軍隊であり、その中で私たちは教会において共に立ち、キリストの戦友として戦うのです。

それでも、次のことを指摘しておきます。武具は、鳥に羽が生えてくるように私たちに生えてくるものではありません。私たちはそれを身に着け、日常生活の中で積極的に用い、実行しなければならないのです。

エペソとコロサイ

多かれ少なかれ体系的に聖書を読む人なら誰でも、この二つの町の教会に宛てた手紙に、ある種の類似点や並行箇所があることに気づいたことでしょう。これらの手紙は同じ時期に書かれており、ピレモンへの手紙も同様です。その意味で、比較研究はたいへん価値のあるものです。

ここでは、次のことを指摘するだけで十分でしょう。正しいはずのないことを見つけ出すことを自らの課題としている聖書批評的な神学は、コロサイ人への手紙はパウロによって書かれたのではなく、それがさらにエペソ人への手紙の筆者（これもパウロではないとされる）の下敷きになった、と主張しています。

それは数ある理論の一つにすぎません。私たちは、手紙の冒頭のあいさつにおいても、中ほどにおいても、終わりにおいても、パウロを筆者として名指ししている聖書自体の証言を信じます。

また、わずか約180キロしか離れていなかった二つの教会が、まったく同じ問題ではないにしても、似た問題を抱えていたことは驚くに当たりません。したがって、これらの手紙がいくつもの並行点を示しているのも当然です。

参考文献（抜粋）：

Arnold, E. Clinton, Downers Grove, 1992, Powers of darkness: principalities & powers in Paul's letters

Arnold, E. Clinton, Eugene OR, 1989, Power and Magic, The concept of power in Ephesians

Blatt, Helmut, Marburg/Lahn, 2002, Das Geheimnis der geistlichen Waffenrüstung

Elberfelder 訳, Hückeswagen, 2005

Ellicott, C.J., London, 2004年復刻版, A Bible Commentary for Bible Students, Volume 8

Grant, F.W., New Jersey, 1901, The Numerical Bible,

Greijdanus, Dr. S., Kampen, 1932, Korte Verklaringen, Deel 12

Lee, Witness, Stuttgart, 1980, Der Brief des Paulus an die Epheser

Lincoln, William, Glasgow, 1980, Assembly Writer Library, Vol.II

House, H. Wayne, Marburg/Lahn, 1983, Chronologische Tabellen und Hintergrundinformationen zum NT

Keener, Craig S., Neuhausen, 1998（原著 1993 Inter Varsity Press）, Kommentar zum kulturellen Umfeld des NT

Kelly, William, Oak Park, Lectures on the Epistle to the Ephesians

Kettling, Siegfried, 1992, Gießen, Typisch evangelisch – Grundbegriffe des Glaubens

Martin, P. Ralph, Wuppertal, 1985, Brockhaus Kommentar zur Bibel

- Medema**, H.P., Vaassen, 1991, De nieuwe Mens: Commentaar op de Brief van Paulus an des Efeziërs
- Remmers**, Arend, Hückeswagen, 2004, In Christus gesegnet, Eine Auslegung zum Epheserbrief
- Smith**, Hamilton, Edingburgh, The Epistle to the Ephesians, An Expository Outline
- Stadelmann**, Helge, Neuhausen Stuttgart, 1993, Der Epheserbrief, EDITION C-Bibelkommentar
- Stott**, John R.W., VTR, Nürnberg 2001, Die Botschaft des Epheserbriefes
- Schmalenbach**, Hanna-M., Marburg/Lahn, 2007, Frausein zur Ehre Gottes im Kontext verschiedener Kulturen
- Tenney**, Merrill C., Marburg/Lahn, 1979, Die Welt des Neuen Testaments
- Wjst**, Walter, Dillenburg, 1999, Ephesus – Aufstieg und Fall einer Großstadtgemeinde
- Hoehner**, Harold W., Michigan, 2002, Ephesians, An Exegetical Commentary
- Peters**, Benedikt, Berneck, 1991, Pulsierendes Leben, Ein Gang durch den Epheserbrief
- Peters**, Benedikt, Berneck, 1989, Dämonische Verstrickungen, Biblische Befreiung

注

1. あるいは「不従順であって」。
2. すなわち、キリスト教の道、あるいはキリスト教の信仰告白。
3. 別の読み方：「こうして、みことばは主の力によって広まり」。
4. あるいは「力あるものであることを示した」。
5. すなわち、キリスト教の道、あるいはキリスト教の信仰告白。
6. すなわち、宗教的な祭りも担当していた民衆の代表者たち。
7. 直訳では「ゼウスから」。